

児玉町遺跡調査会報告書 第11集

天 田 遺 跡

— B地点の調査 —

埼玉県児玉町遺跡調査会

児玉町遺跡調査会報告書 第11集

あま だ い せき
天 田 遺 跡

— B地点の調査 —

2000

埼玉県児玉町遺跡調査会

序

群馬県との県境に近い埼玉県の北西部に位置する人口2万人の児玉町は、町の南側半分を秩父の峰々から連なる上武山地が占め、北側半分には山地から半島状に延びる児玉丘陵や、広大な低台地の本庄台地と、女堀川や旧赤根川によって開析された沖積低地が広がっています。このような、変化に富んだ地形による豊かな自然環境に恵まれた当町には、古より多くの人々が住み着いており、その先人達の生活の痕跡である遺跡（埋蔵文化財）の数は、現在までのところ町内に300箇所以上も確認されています。まさに、「みどりと歴史の町」を自負する所以であります。これらの遺跡は、当町の個性ある歴史と文化を物語る貴重な資料となるものであり、それらの保護と活用を図りながら、後世に伝えていかなければならない事は、改めて言うまでもないことでしょう。

本書は、平成2年に実施した児玉町大字宮内に所在する天田遺跡（B地点）の発掘調査の成果を期したものです。発掘調査は、民間会社の事務所建設に伴う比較的小規模なものではありましたが、縄文時代や平安時代の住居跡など、多くの遺構が検出され、一部ではありますが本遺跡の様相の一端を明らかにする事ができたことは、大きな成果と言えましょう。

最後に、発掘調査から本書の刊行にあたり、ご協力を賜りました不二ボーリング工業株式会社をはじめとする関係各位に深く感謝申し上げますとともに、厳冬の中、現地の調査に携われた調査員や作業員の皆様に対して、厚くお礼申し上げます。

平成12年6月1日

児玉町教育委員会教育長
児玉町遺跡調査会会長
富 丘 文 雄

例 言

1. 本書は、埼玉県児玉郡児玉町大字宮内字天田平871・872番地に所在する天田遺跡（B地点）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、不二ボーリング工業株式会社の事務所建設に伴う事前の記録保存を目的として、同社より委託を受けた児玉町遺跡調査会が実施した。
3. 発掘調査の期間は、平成2年1月4日から同年1月30日のほぼ1ヶ月の期間を要し、その調査担当には恋河内昭彦があたった。
4. 発掘調査から本書刊行に至る経費は、すべて不二ボーリング工業株式会社が負担した。
5. 本書の執筆及び編集は、恋河内が行った。
6. 本書の写真は、遺構・遺物とも恋河内が撮影した。
7. 遺構番号は、現地調査ではいずれも1号から順番に付けていたが、本書刊行に際してA地点からの続き番号に変更した（新旧遺構番号対比表参照）。
8. 出土遺物観察表に示した記号は、以下のとおりである。
A－法量、B－成形、C－整形・調整手法、D－胎土、E－色調、F－残存度、
G－出土層位、H－備考、
9. 本書中で使用した地図は、国土地理院発行の5万分の1、2万5千分の1である。
10. 現地発掘調査から本書刊行にあたって、下記の方々や機関より様々なご教示やご協力を賜った。記して感謝いたします。
赤熊浩一、荒川正夫、伊丹 徹、岩瀬 謙、梅沢太久夫、太田博之、岡本幸男、金子彰男、木戸春夫、坂本和俊、篠崎 潔、須田英一、外尾常人、田村 誠、富田和夫、中沢良一、中村倉司、長瀧歳康、増田一裕、丸山 修、矢内 勲、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、埼玉県埋蔵文化財調査事業団、早稲田大学本庄校地文化財調査室、不二ボーリング工業株式会社

目 次

序

例言

第Ⅰ章	発掘調査に至る経緯	1
第Ⅱ章	遺跡の地理的・歴史的環境	3
第Ⅲ章	遺跡の概要	5
第Ⅳ章	検出された遺構と遺物	9
	1. 住 居 跡	9
	2. 掘立柱建物跡	29
	3. 柵 列 跡	33
	4. 土 壇	35
	5. 溝 跡	42
	6. その他の遺物	42
第Ⅴ章	ま と め —奈良・平安時代の土器と遺構—	45
	1. 奈良・平安時代の土器	45
	2. 遺構の変遷	47
参 考 文 献		49
	《写真図版》	

天田遺跡B地点新旧遺構番号対比表

<住居跡>

新番号	旧番号
第8号住居跡	第1号住居跡
第9号住居跡	第2号住居跡
第10号住居跡	第3号住居跡
第11号住居跡	第4号住居跡
第12号住居跡	第5号住居跡
第13号住居跡	第6号住居跡
第14号住居跡	第7号住居跡
第15号住居跡	第8号住居跡
第16号住居跡	第9号住居跡
第17号住居跡	第10号住居跡
第18号住居跡	第11号住居跡

<溝跡>

新番号	旧番号
第7号溝跡	第1号溝跡
第8号溝跡	第2号溝跡
第9号溝跡	第3号溝跡
第10号溝跡	第4号溝跡
第11号溝跡	第5号溝跡
第12号溝跡	第6号溝跡

<土壇>

新番号	旧番号
第13号土壇	第1号土壇
第14号土壇	第2号土壇
第15号土壇	第3号土壇
第16号土壇	第4号土壇
第17号土壇	第5号土壇
第18号土壇	第6号土壇
第19号土壇	第7号土壇
第20号土壇	第8号土壇
第21号土壇	第9号土壇
第22号土壇	第10号土壇
第23号土壇	第11号土壇
第24号土壇	第12号土壇
第25号土壇	第13号土壇
第26号土壇	第14号土壇
第27号土壇	第15号土壇
第28号土壇	第16号土壇

第 I 章 発掘調査に至る経緯

平成元年6月5日、見玉町大字宮内字天田平の871番地と872番地に、事務所と駐車場の建設を計画している不二ボーリング工業株式会社より、開発予定地内における埋蔵文化財の所在について、見玉町教育委員会に照会があった。

見玉町教育委員会では、照会のあった開発予定地を見玉町の「遺跡分布地図」と照合したところ、開発予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である見玉町№104遺跡(天田遺跡)の範囲内に位置することから、埋蔵文化財が存在する可能性が高いと考えられた。そのため、照会者の不二ボーリング工業株式会社に対して、開発予定地内の埋蔵文化財の所在については、試掘調査を実施して明確にする必要がある旨を回答した。

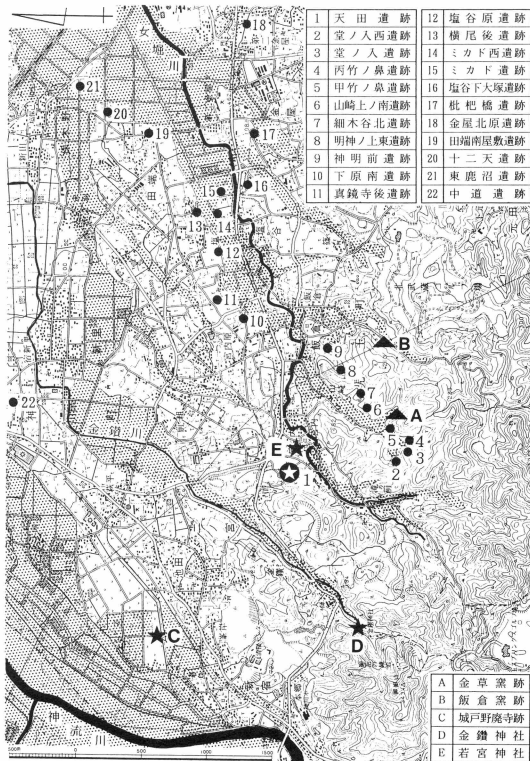
その後、同社より開発予定地内の試掘調査について依頼があり、同年の6月30日に試掘調査を実施したところ、開発予定地内には焼いた籐や廃材等を埋めた比較的規模の大きな攪乱坑がいくつか見られたが、縄文時代や平安時代の竪穴住居跡や土壌などの遺構がほぼ全域から検出された。この結果、開発予定地内における埋蔵文化財の所在が明確になったため、「開発予定地は埋蔵文化財が存在するため現状で保存することが望ましいが、やむおえず現状変更する場合は、当該開発に先立って、埋蔵文化財の取り扱いについて町教育委員会と協議すること」を、平成元年7月12日付け見教社第138号により、試掘調査の結果とともに回答した。

そして、同社と町教育委員会との間で開発予定地内の埋蔵文化財の取り扱いについて協議した結果、現状で保存することが極めて困難であることから、やむおえず発掘調査を実施して記録保存することになった。発掘調査の実施にあたっては、不二ボーリング工業株式会社と見玉町遺跡調査会で発掘調査に関する委託契約を締結し、年が明けた平成2年1月4日から現地における発掘調査が実施された。

なお、発掘調査に関わる届出は、平成元年11月1日に見玉町遺跡調査会会長より「埋蔵文化財発掘調査届」が、不二ボーリング工業株式会社代表取締役より「埋蔵文化財発掘届」が、見玉町教育委員会と埼玉県教育委員会を経て、文化庁長官に提出された。



第1図 天田遺跡位置図



第2図 周辺の奈良・平安時代主要遺跡

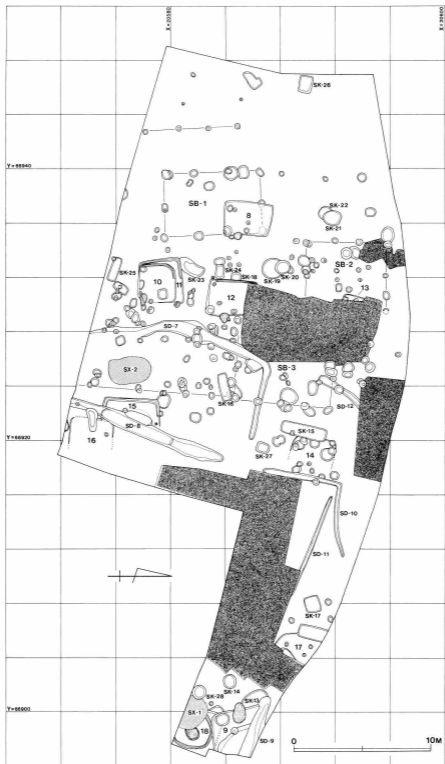
第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

本遺跡周辺の地形は、南側の上武山地から断層線の八王子-高崎構造線によって区分された、児玉丘陵と呼ばれる丘陵地帯に属する。この丘陵地帯の北側には、西側を流れる神流川によって形成された扇状地地形の本庄台地が広がり、この台地の東側に沿って、山地内より流れ出る女堀川や旧赤根川などの小河川の開析によって形成された、帯状の沖積低地が広がっている。児玉丘陵は、北東方向に半島状に延びる標高100m～180mを測る複数の小支丘群によって構成されている。同様の小支丘群は、小山川の東側にも見られるが、それらについては別に松久丘陵と呼ばれて区別されている。小支丘の間は、山地からの湧水によって開析された幾筋もの細長い谷が発達し、谷奥に構築した溜池の灌漑による谷田が営まれている。

本遺跡は、この児玉丘陵の西から2番目にあたる小支丘上の奥に位置し、山地との境に近い構造線付近に立地している。この小支丘の北西側には神川町金鑽の谷から流れ出る金鑽川が北東方向に向かって流れ、南東側には児玉町宮内の谷から流れ出る旧赤根川（現女堀川）が東流している。この赤根川は、現在は河川改修によって下流の女堀川と一本化されているが、改修以前は保木野の近くで金鑽川と同じく北側の九郷用水に合流する流路をとっていた。この赤根川と金鑽川は、いずれも自然流路としては不自然な流路を取っている部分があり、おそらく人工的に流路が改変されたものと推測されている（鈴木1996）。

この丘陵地帯を主体とする女堀川上流域には、式内社で名神大社の格式をもつ武蔵国二宮の金鑽神社や、その旧社地と推測されている宮内の若宮神社（坂井1976）が鎮座し、丘陵部の北側に近接する低台地上には、古代瓦を出土し寺院の可能性も考えられる城戸野廃寺（坂本1973、昼間1982）や精進場遺跡（梅沢・高橋他1978）などもあり、この地域が古代児玉郡の政治的・文化的な中心地を形成していたことが窺える。また、飯倉の山崎谷を中心とした丘陵に接する山地内には、8世紀代の瓦窯である金草窯跡や飯倉窯跡が所在し、9世紀以降も小規模な須恵器生産が行われた児玉窯跡群がある。その中には、宝龜2年（771年）の紀年銘木簡が出土した山崎上ノ南遺跡（大熊1998）や、平安時代の鍛冶炉が検出された甲竹ノ鼻遺跡、炭窯が検出された細木谷北遺跡などがあり、小規模ながら一つの手工業生産地域として山地内が開発されていた様相がうかがえる。

本遺跡の主体をなす奈良・平安時代の集落遺跡も当地域には比較的多く所在している（第2図）が、現在までの調査では、北側の金鑽川流域に比べて、南側の赤根川流域の方に圧倒的に多く分布しているように見える。しかしながら、金鑽川流域は調査例が少なく、また神川町新里の広い低台地上に立地する古墳時代後期からの大集落である中道遺跡では、多くの地点で該期の住居跡や土壌が検出されている（駒宮他1974、梅沢・高橋他1978、田村1981・1982・1983・1985・1986・1987・1988・1990、田村他1998、金子1991、）など、未だ該期集落の具体的な様相が把握できる段階ではないため、現状での両流域の直接的な比較は困難であろう。赤根川流域の奈良・平安時代の集落は、その多くが9世紀以降の平安時代の集落であり、特に10世紀以降になって丘陵縁辺部の低台地上に進出した小規模集落が顕著である。この赤根川の上流域は、古代末～中世初期には「枝松名」に属し、金鑽神社の神社領ではなかったかと推測されている（峠岸1978）。しかしその後は、近隣の在地領主である児玉党塩谷氏（野口1991）や丹党安保氏による当地域の所領化が進行し、その所領の多くを失っている。



第3図 天田遺跡B地点全体図

第三章 遺跡の概要

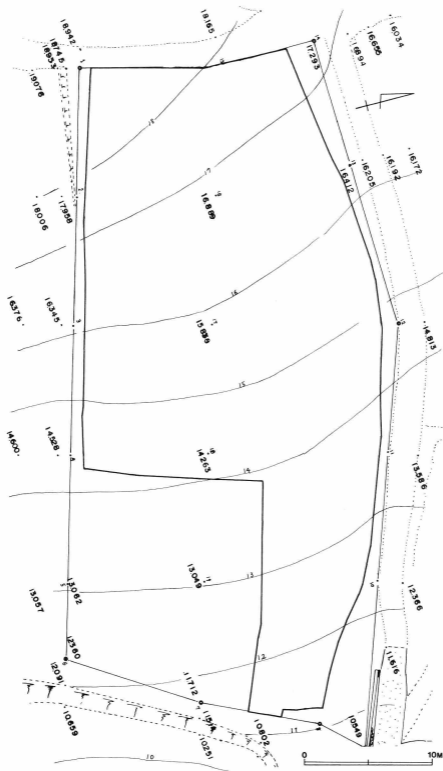
天田遺跡は、児玉町の西端にあたる大字宮内に所在し、南側の上武山地から北東方向に半島状に延びる児玉丘陵の標高150m付近の丘陵上から東側斜面にかけて立地している。本遺跡の眼下には、女堀川（旧赤根川）の水源である狭い宮内の谷があり、その前方には女堀川の上流域から中流域の低地部を眺望することができる、非常に見晴らしの良い場所である。

天田遺跡の発掘調査は、農道改良舗装工事に伴うA地点とC地点、民間の事務所建設に伴うB地点（本報告）の3箇所で実施されている。いずれも小規模な調査であるため、未だ本遺跡の全体像や具体的な変遷については明らかにできないが、これまでの調査では先土器時代の文化層（A地点）や縄文時代（前・中期）と奈良・平安時代の住居跡などの遺構や遺物が検出されている。

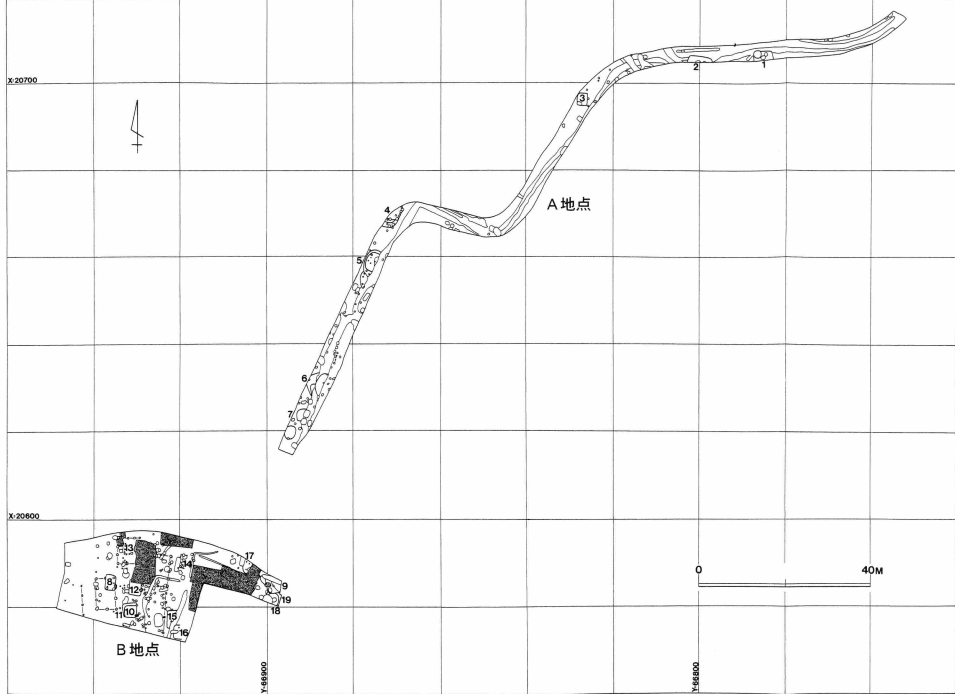
今回報告するB地点は、A地点の南西側に位置し、旧宮内村から金鑽村に通じる旧道（天田坂）を挟んで近接している。標高170m前後の丘陵東側斜面にあり、調査区の東西両端の比高差が約8mを測る（第4図）比較的傾斜のきつい斜面である。検出された遺構は、一部が流失していたり、耕作による強い削平を受けているものが多く、遺存状態が極めて悪いものが大半である。また、調査区内には籐や廃材を埋めた重機による規模の大きな攪乱坑が3箇所見られるが、調査区の畑には籐が生えていたような形跡が見られないため、これらは他所から持ち込んで埋められたものだろう。

B地点の調査で検出された主な遺構は、縄文時代の前・中期と、奈良・平安時代のものである。縄文時代前期の遺構は、諸磯b式期の住居跡2軒（第17・18号住居跡）と土壌2基（第13・14号土壌）で、いずれも調査区の東端部にまとまって分布している。住居跡は、調査区内でその一部が検出されただけであるため、形態や規模などは明確ではないが、いずれもコーナー部の丸みが強い四角形ばい形態を基調にしているようである。他の地点では該期の遺構は検出されておらず、また全体的に遺物も少量であることから、比較的小規模な集落と考えられる。中期は、住居跡等の遺構ではなく、加曾利EⅠ～Ⅲ式期の倒木痕が2基（SX-1・2）検出されただけである。北側に近接するA地点では最も高所の調査区南側で、該期の住居跡が4軒（第4～7号住居跡）検出されている。それぞれ建て替え等による重複が顕著で、住居跡の立地場所がいずれも丘陵平坦部から斜面に移行する場所であることから、丘陵平坦部の広場を取り囲むように住居が分布する、小規模な環状集落を構成している可能性も考えられる。B地点で検出された2基の倒木痕も、あるいはこれらの集落の造営と何だかの関わりをもつものかもしれない。

奈良・平安時代は、住居跡9軒（第8～16号住居跡）・掘立柱建物跡3棟（第1～3号掘立柱建物跡）・柵列跡2・土壌7基である。奈良時代は、8世紀中頃の第9号住居跡の1軒だけである。他の地点では該期の遺構は明確でないため、比較的小規模な集落を形成していたものと考えられる。その後集落は継続して展開するのかわからないが、平安時代の9世紀代には、重複する第15・16号住居跡とともに、第1号掘立柱建物跡や柵列を伴う集落かあるいは屋敷が形成されたようである。10世紀には、A地点やC地点などの広範囲に住居が拡散し、集落規模が拡大するものと思われ、B地点でも住居跡や掘立柱建物跡などが10世紀後半まで見られ、継続的に集落が営まれたようである。11世紀以降については、現在までの調査では遺構や遺物が検出されていないため、不明である。



第4图 B地点現況高低圖



第5図 天田遺跡A・B地点全体図

第IV章 検出された遺構と遺物

1. 住居跡

第8号住居跡（第7図）

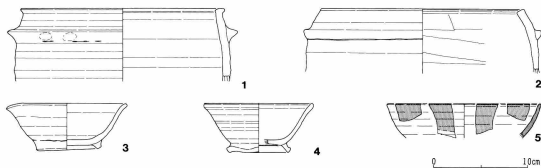
調査区中央部のやや西側寄りに位置し、重複する第1号掘立柱建物跡を切っている。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えない。

平面形は、南北方向に長い長方形を呈するが、北側壁がやや西側に開いている。規模は、南北方向が最高で3.62mあり、東西方向は最高で2.60mを測る。壁は、各壁とも緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは、西側壁で最高24cm、東側壁で最低7cmある。床面は、住居壁際の周辺部をロームブロックを多量に含む暗褐色土を埋め戻した貼床式で、住居中央部は非常に堅くしまっているが、壁際周辺部はやや軟弱である。

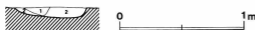
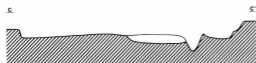
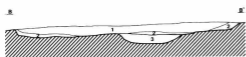
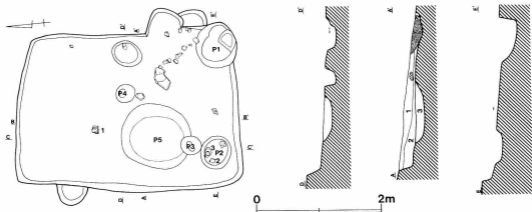
ピットは、住居内から4箇所検出されている。P1は、南東側コーナー部に位置し、その位置や形態から貯蔵穴と考えられ、72cm×64cmの楕円形を呈する。底面は、広くやや丸みをもち、床面からの深さは24cmある。P2は、南西側コーナー部に位置し、52cm×46cmの円形ぎみの形態を呈している。底面は広く平坦で、床面からの深さは10cm程度ある。ピット内からは、№2の羽釜と№3の高台付環の破片が出土している。P3とP4は、いずれも長さ30cmの円形を呈し、床面からの深さは20cm程度である。P5は、いわゆる床下土壌で、120cm×98cmの比較的整った楕円形ぎみの形態を呈している。底面はやや丸みをもち、深さは15cm程度で、内部には白色粘土ブロックや焼土粒子が見られた。

カマドは、東側壁の中央からやや南側寄りに位置し、壁を40cm程度掘り込んで構築している。袖や煙道部の痕跡は見られず、燃焼部だけが残存している。燃焼部は、幅が60cmあり、床面からの掘り込みはあまりない。燃焼部の覆土中には、焼土ブロックや焼土粒子が見られたが、燃焼部自体はあまり焼けていない。

遺物は、カマド周辺やP2内から土器の破片が少量出土しただけである。また、住居中央付近には、長さ40cm・幅20cmの不定形で扁平な片岩が床面上から出土しているが、台石として使用されていたものではなく、おそらくカマドの構築材として利用されていたものが、カマドの崩壊とともに転出したものと推測される。



第6図 第8号住居跡出土遺物



第8号住居跡土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第2層：暗黄褐色土層（ローム粒子を多量に、ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）

第3層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、白色粘土ブロック・ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第8号住居跡カマド土層説明

第1層：暗赤褐色土層（焼土ブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）

第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第3層：暗褐色土層（ロームブロックを均一に、焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第7図 第8号住居跡

第8号住居跡出土土器観察表

1	羽 釜	A. 口縁部径(21.4cm)。B. 粘土組織み上げ後ロクロ調整。鈔貼り付け。C. 内外面とも回転ナデ。鈔部指押さえの痕跡あり。D. 赤色粒・白色粒・黒色粒 E. 外-橙褐色、内-淡橙褐色。F. 口縁部1/6破片。G. 覆土中。H. 酸化焙焼成。
2	羽 釜	A. 口縁部径(21.4cm)。B. 粘土組織み上げ後ロクロ調整。鈔貼り付け。C. 内外面とも回転ナデの後、内面軟質刷毛状工具によるナデ。D. 赤色粒。E. 内外-淡褐色。F. 口縁部1/6破片。G. P2内。H. 酸化焙焼成。
3	高台付坏	A. 口縁部径12.6、器高5.0cm、高台部径6.8cm。B. ロクロ成形。高台部貼り付け。C. 内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。D. 赤色粒・片岩粒。E. 内外-淡褐色。F. 約2/3。G. P2内。H. 酸化焙焼成。
4	高台付坏	A. 口縁部径(11.5cm)、器高(5.2cm)、高台部径(5.9cm)。B. ロクロ成形。高台部貼り付け。C. 内外面回転ナデ。D. 赤色粒・角閃石。E. 内外-淡橙褐色。F. 約1/4。G. 覆土中。H. 酸化焙焼成。
5	灰釉陶器 碗	口縁部径(16.2cm)。B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデの後施釉。D. 褐色粒・白色粒。E. 内外-淡灰白色。F. 口縁部1/7破片。G. 覆土中。

第9号住居跡(第8図)

調査区の東端部に位置し、重複する第18号住居跡と第13号土壌を切っている。住居跡の東側を第9号溝跡に切られているため、住居の全容は不明である。

平面形は、調査区内で検出された部分から推測すると、コーナー部がやや丸みをもつ方形か長方形を呈するものと思われる。規模は、東西方向が3.36mまで、南北方向が2.20mまで測れる。壁は、残存する西側壁と南側壁とも緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは西側壁で最高33cmある。床面は、住居壁際の周辺部をロームブロックを含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式であるが、全体的にやや軟弱である。

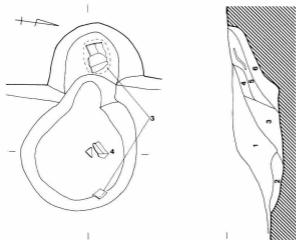
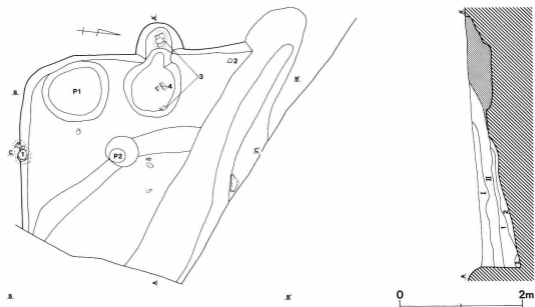
ピットは、残存する住居内では2箇所検出されている。P1は、住居南西側コーナー部に位置するものである。106cm×95cmの規模の大きな楕円形を呈し、その位置や形態から貯蔵穴の可能性が考えられるものである。底面は、広くやや丸みをもち、底面からの深さは20cm程度ある。P2は、直径50cm程度の円形を呈し、床面からの深さは43cmある。

カマドは、住居西側壁に位置し、壁を46cm程掘り込んで構築している。袖や煙道部の痕跡は見られず、燃焼部だけが残存している。燃焼部は、床面を10cm程度楕円形状に掘り窪めているが、全体的にあまり焼けていない。

遺物は、カマド内や覆土中から灰釉陶器・須恵器・土師器などの破片が出土している。本住居跡に伴うものは、カマド内から出土したNo.3の土師器甕とNo.4の土師器坏で、覆土中から出土したNo.1の灰釉陶器とNo.2の須恵器皿は混入と考えられる。

第9号住居跡出土土器観察表

1	灰釉陶器 長頸壺	A. 口縁部径10.2cm、器高(25.2cm)、高台部径9.2cm。B. 粘土組織み上げ後ロクロ調整。頸部と胴部は接合。高台部貼り付け。C. 口部内外面とも回転ナデ。胴部は下半を回転篋ケズリの後、内外面とも回転ナデ。底部外面回転糸切り。高台部内外面回転ナデ。D. 白色粒・黒色粒。E. 外-暗茶褐色、内-暗灰色。F. 口縁部完形。胴上半1/4、胴下半1/2。G. 覆土中。H. 口縁部内外面と胴部外面上半に暗緑色釉を施す。胴部上半と下半は、直接接合しない。器形は図上復元。
---	-------------	---



第9号住居跡内溝跡土層説明

第1層：現耕作土（A軽石混入。）

第II層：旧耕作土（A軽石混入。）

第1層：暗褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）

第2層：暗黄褐色土層（ロームブロックを均一に含む。粘性・しまりともない。）

第9号住居跡カマド土層説明

第1層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、粘土粒子・焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第2層：暗灰褐色土層（粘土粒子を多量に、焼土粒子・ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）

第3層：黒褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）

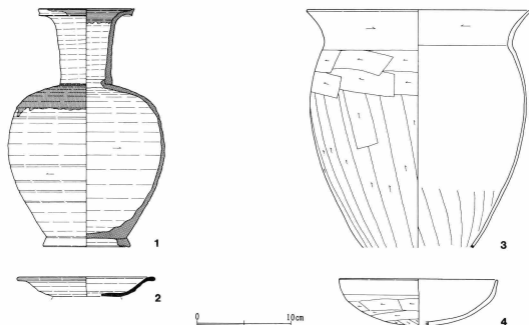
第4層：暗黄褐色土層（粘土ブロックを多量含む。粘性・しまりともない。）

第5層：暗赤褐色土層（焼土粒子を多量含む。粘性・しまりともない。）

第6層：暗褐色土層（焼土粒子・ロームブロックを多量含む。粘性・しまりともない。）

第8図 第9号住居跡

2	須恵器 皿	A. 口縁部径(14.6cm)、器高2.0cm。B. ロクロ成形。C. 内外面とも回転ナデ。底部外面回転糸切り。D. 白色粒。E. 外-暗灰色、内-黒灰色。F. 約1/2。G. 覆土中。
3	甕	A. 口縁部径(23.7cm)。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外-橙褐色。F. 約1/3。G. カマド内。
4	坏	A. 口縁部径(16.8cm)。C. 口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ケズリ、内面ナデ。D. 白色粒・角閃石。E. 内外-淡橙褐色。F. 1/4破片。G. カマド内。



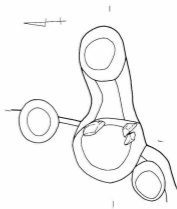
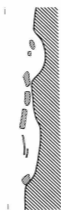
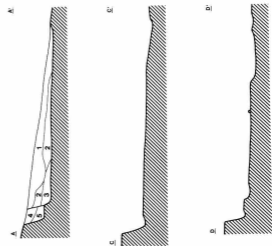
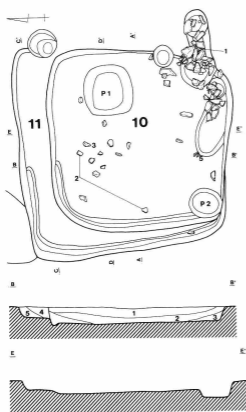
第9図 第9号住居跡出土遺物

第10号住居跡(第10図)

調査区中央部の南側寄りに位置し、重複する第11号住居跡を切っている。遺構の遺存状態は、あまり良好とは言えない。

平面形は、コーナー部の丸み強い方形ぎみの形態を呈している。規模は、南北方向が2.97m、東西方向が2.90mを測る。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは西側壁で最高40cmある。北壁下の一部から西側壁下にかけて、幅20cm・深さ3cm程度の浅い壁溝が巡っている。床面は、住居壁際の周辺部をロームブロックを多量に含む暗黄褐色土を埋め戻して平坦にした貼床式で、全体に堅くしまっている。

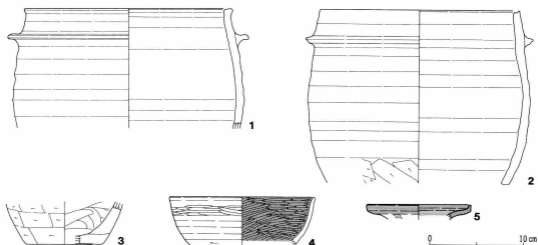
ピットは、住居内で2箇所検出されているが、いずれも本住居跡に伴うものか不明である。P1は、住居内の北東側寄りに位置し、80cm×80cmの方形ぎみの形態を呈している。底面は広く平坦で、床面からの深さは10cm程度でやや浅い。P2は、南東コーナー部に位置し、壁溝と一部重複している。直径50cmの円形を呈し、床面からの深さは7cm程度である。



第10图 第10・11号住居跡

カマドは、住居東側壁の南東コーナー部にかなり寄った位置にあり、壁を若干掘り込んで構築されている。規模は、幅が58cm、残存長は126cmを測る。袖の痕跡は見られないが、燃焼部の奥には左右に石が立てられており、またカマド内やその周辺から多量の石が出土していることからすると、石組みのカマドであった可能性が高いと思われる。煙道部は、若干傾斜して住居外に延びているが、先端部はピット状に深くなっている。

遺物は、カマド内や覆土中から、灰釉陶器壺や羽釜などの土器の破片が少量出土しただけである。



第11図 第10号住居跡出土遺物

第10号住居跡出土土器観察表

1	羽釜	A. 口縁部径(22.0cm)。B. 粘土紐積み上げ後ロクロ調整。鈔貼り付け。C. 内外面とも回転ナデ。 D. 白色粒・黒色粒。E. 外-淡橙褐色、内-淡茶褐色。F. 口縁部1/4破片。G. カマド内。H. 酸化焙焼成。外面に煤の付着あり。
2	羽釜	A. 口縁部径(21.0cm)。B. 粘土紐積み上げ後ロクロ成形。鈔貼り付け。C. 内外面とも回転ナデの後、胴部外面下半ケズリ。D. 片岩粒・赤色粒。E. 内外-淡茶褐色。F. 1/4破片。G. 床面付近。 H. 酸化焙焼成。
3	羽釜	A. 底部径(8.0cm)。B. 粘土紐積み上げ後ロクロ調整。C. 胴部外面ケズリ。内面指ナデ。底部外面ナデ。 D. 白色粒・赤色粒。E. 内外-淡橙褐色。F. 底部1/3破片。G. 覆土中。H. 酸化焙焼成。
4	碗	A. 口縁部径(15.4cm)。B. ロクロ成形。C. 体部外面回転ナデの後、上半ミガキ、下半回転篋ケズリ。 内面ミガキ。D. 赤色粒・白色粒。E. 外-淡茶褐色、内-黒色。F. 体部1/6破片。G. 覆土中。 H. 酸化焙焼成。内面黒色処理。
5	灰釉陶器壺	A. 口縁部径(11.0cm)。B. ロクロ成形。C. 口縁部内外面回転ナデ。D. 黒色粒。E. 外-淡褐色、内-淡緑色。 F. 口縁部1/6破片。G. 覆土中。H. 口縁端部に淡緑色釉を施す。

第10・11号住居跡土層説明

第1層：黒褐色土層（ローム粒子・炭化粒子・白色粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第2層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、炭化粒子・焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第3層：暗茶褐色土層（ローム粒子を多量含む。粘性・しまりともない。）

第4層：暗褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第5層：暗茶褐色土層（ローム粒子・ロームブロックを均一に、炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第11号住居跡（第10図）

調査区中央部の南側寄りに位置し、重複する第10号住居跡に大半を切られている。遺構の遺存状態は悪く、住居の東側壁はすでに削平されている。

平面形は、残存する部分から推測すると、比較的整った方形を呈していたものと思われる。規模は、東西方向が3.33m、南北方向が3.24mを測る。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは西側壁で最高28cmある。北壁下の西側半分から西側壁下にかけて、幅15cm・深さ3cm程度の浅い壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、全体に堅くしまっている。

カマドは、残存する南北両壁と西側壁にその痕跡が見られないことから、すでに削平されている東側壁にあったものと推測される。

遺物は、覆土中から土器片が数片出土しただけである。

第12号住居跡（第12図）

調査区中央部に位置し、南側には第10・11号住居跡が、西側には第8号住居跡が近接している。本住居跡の北側は、近年の掘削によってすでに破壊されており、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部がやや丸みをもつ南北方向に長い長方形を呈していたものと思われる。規模は、南北方向が3.50m、東西方向が2.70mを測る。壁は、直線的に若干傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは西壁で最高30cmを測る。西壁下には、幅10cm・深さ5cm程度の壁溝が見られる。床面は、住居壁際の周辺部をロームブロックを含む暗黄褐色土を埋め戻した貼床式で、住居中央部に比べて壁際に近い周辺部はやや軟弱である。

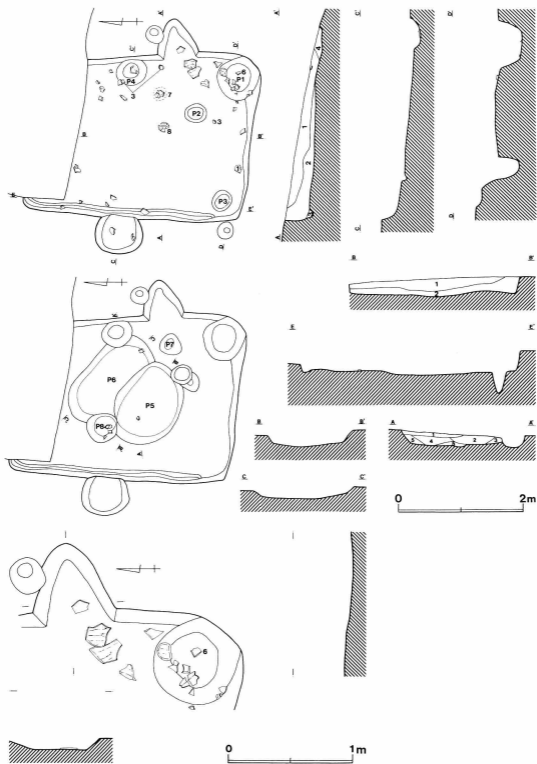
ピットは、住居床面上でP1～P4の4箇所が、床面下の掘り方でP5～P8の4箇所が検出されている。P1は、住居南東コーナー部に位置し、いわゆる貯蔵穴と考えられるもので、67cm×64cmの円形ぎみの形態を呈している。底面は広く平坦で、床面からの深さは30cmある。P1内の覆土中からは、坏を主体とする比較的多くの土器片が出土している。P2は、住居中央部の南東寄りに位置する。34cm×28cmの円形を呈し、床面からの深さは20cmある。P3は、住居南西コーナー部に位置し、34cm×30cmの円形を呈している。床面からの深さは35cmあり、比較的深い。P4は、東側

第12号住居跡土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
- 第2層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
- 第3層：暗黄褐色土層（ローム粒子を多量含む。粘性・しまりともない。）
- 第4層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）

第12号住居跡床下土壌土層説明

- 第1層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第2層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
- 第3層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
- 第4層：暗茶褐色土層（ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）
- 第5層：暗黄褐色土層（ロームブロックを多量含む。粘性・しまりともない。）

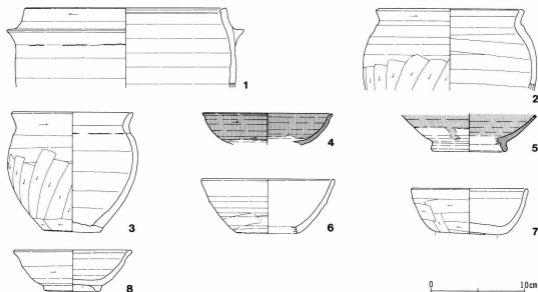


第12図 第12号住居跡

壁下の中央付近に位置し、50cm×40cmの楕円形ぎみの形態を呈している。底面は広くやや丸みを持ち、床面からの深さは15cmある。P5とP6は、いわゆる床下土壌で、P6がP5を切っている。P5は、135cm×100cmの楕円形ぎみの形態を呈している。底面は広く平坦で、床面からの深さは20cmである。覆土は、ロームブロックを含む暗茶褐色土が主体で、上面は貼床されている。P6は、162cm×94cmの楕円形ぎみの形態を呈している。底面は広く平坦で、床面からの深さは15cmである。覆土は、焼土粒子を含む暗褐色土が主体である。P7は、34cm×32cmの不整形を呈し、深さは5cm程度である。P8は、直径48cmの円形を呈し、P5とP6を切っている。深さは20cmあり、埋土中からは土器片が出土している。

カマドは、住居東側壁の南側寄りに位置し、壁を34cm掘り込んで構築している。袖や煙道部の痕跡は見られず、燃烧部だけが残存している。燃烧部は、床面を若干掘り窪め、ほぼ水平に作られているが、全体的にあまり良く焼けていない。

遺物は、カマド内や貯蔵穴周辺から、土器片が比較的多く出土している。また、カマド近くの覆土中からは、比較的大きく扁平な片岩が3個出土している。



第13図 第12号住居跡出土遺物

第12号住居跡出土土器観察表

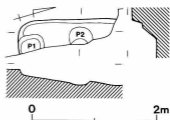
1	羽 釜	口縁部径(21.2cm)。B.粘土紐積み上げ成形。鈎貼り付け。C.内外面とも回転ナデ。D.片岩粒。E.外一暗灰色、内一淡褐色。F.口縁部1/6破片。G.覆土中。H.酸化焙焼成。内面煤付着。
2	甕	A.口縁部径(15.6cm)。B.粘土紐積み上げ後ロクロ調整。C.内外面回転ナデの後、胴部外面下半ケズリ、内面ナデ。D.赤色粒・白色粒。E.内外一暗橙褐色。F.1/4破片。G.覆土中。H.酸化焙焼成。

3	小形 甕	A. 口縁部径12.8cm、器高12.7、底部径6.0cm。B. 粘土組織み上げ後ロクロ調整。C. 口縁部内外面回転ナデの後、胴部外面下半ケズリ、内面篋ナデ。底部外面ケズリの後ナデ。D. 白色粒・赤色粒。E. 内外一淡褐色。F. 約2/3。G. 床面付近。H. 酸化焙焼成。外面煤付着。
4	灰釉陶器 碗	A. 口縁部径(13.8cm)。B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデの後、下半回転篋ケズリ。D. 褐色粒・白色粒。E. 内外一淡灰白色。F. 1/6破片。G. 覆土中。H. 釉は、内外とも淡緑色釉を施す。
5	灰釉陶器 高台付碗	A. 高台部径(8.0cm)。B. ロクロ成形。高台部貼り付け。C. 内外面回転ナデ。D. 白色粒。E. 内外一淡灰白色。F. 1/6破片。G. 覆土中。H. 釉は、内外とも緑色釉を施す。
6	坏	口縁部径(14.1cm)、器高(5.8cm)、底部径(6.6cm)。B. ロクロ成形。C. 外面回転ナデの後、下半にナデを加える。内面回転ナデ。D. 赤色粒・白色粒。E. 内外一黒褐色、器肉一暗褐色。F. 口縁部 1/4破片。G. P1上面。H. 酸化焙焼成。
7	坏	A. 口縁部径12.4cm、器高4.9cm、底部径7.0cm。B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデの後、体部外面に部分的なケズリ。底部外面回転糸切り。D. 白色粒・角閃石。E. 内外一暗灰色。F. ほぼ完形。G. 床面付近。H. 酸化焙焼成。
8	高台付坏	A. 口縁部径12.5cm、器高4.4cm、高台部径5.9cm。B. ロクロ成形。高台部貼り付け。C. 体内外面回転ナデ。底部外面回転糸切り。高台部内外面回転ナデ。D. 白色粒・赤色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. ほぼ完形。G. 床面上。H. 酸化焙焼成。

第13号住居跡(第14図)

調査区中央部の北側寄りに位置する。住居跡の大半を近年の攪乱によって破壊されており、遺構の遺存状態は劣悪である。残存していたのは、住居跡の南西コーナー部にあたる部分だけであるため、厳密には住居跡が明確ではないが、ロームブロックを含む埋土による貼床の痕跡が見られたため、一応住居跡の一部と考えたものである。残存する部分では、小規模で浅いピットが2箇所検出されたが、遺構に伴うものか明確ではない。

遺物は、覆土中から8世紀後半～9世紀前半の須恵器や土師器の破片が、極少量出土しただけである。



第14図 第13号住居跡

第14号住居跡（第15図）

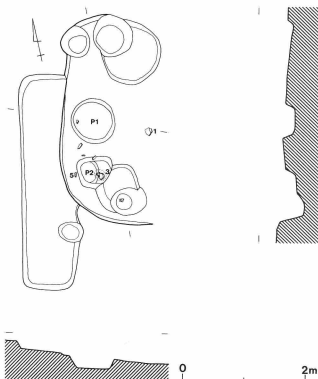
調査区中央部の北東側寄りに位置し、重複する第15号土壇に切られている。住居跡の東側半分はすでに削平されており、遺構の遺存状態は極めて悪い。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部の丸みが強い方形か長方形を呈していたものと思われる。規模は、南北方向が3.30m、東西方向は1.48mまで測れる。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で17cmある。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式で、全体に堅くしまっている。

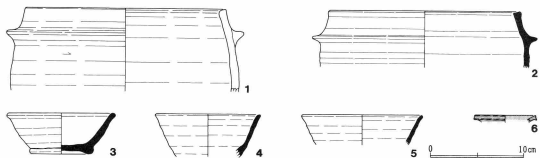
住居内には土壇状やピットなど多くの掘り込みが見られるが、本住居跡に伴う可能性が高いものは、P1とP2の2箇所だけである。P1は、直径70

cm程度の比較的整った円形を呈している。底面は広く平坦で、床面からの深さは20cmある。P2は、住居南西コーナー部付近に位置し、57cm×50cmの長方形ぎみの形態を呈している。底面は、2段に深くなっており、床面からの深さは30cmある。P2の覆土中からは、No.3の高台付坏が出土している。

遺物は、覆土中を主体に灰釉陶器や須恵器などの土器片が少量出土しただけである。



第15図 第14号住居跡



第16図 第14号住居跡出土遺物

第14号住居跡出土土器観察表

1	羽 釜	A. 口縁部径(21.2cm)。B. 粘土紐積み上げ後ロクロ調整。鏝貼り付け。C. 内外面とも回転ナデ。D. 赤色粒・白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 1/6破片。G. 床面上。H. 酸化焙焼成。
---	-----	---

2	羽釜	A. 口縁部径(20.4cm)。B. 粘土紐積み上げ後ロクロ調整。鈔貼り付け。C. 内外面とも回転ナデ。D. 白色粒・黒色粒。E. 内外一灰色。F. 口縁部1/8破片。G. 覆土中。H. 外面煤付着。
3	須恵器高台付坏	A. 口縁部径11.5cm。器高(6.4cm)、高台部径4.3cm。B. ロクロ成形。高台部貼り付け。C. 体部内外面とも回転ナデ。底部外面回転糸切り。高台部内外面回転ナデ。D. 赤色粒・白色粒。E. 内外一灰褐色。F. ほぼ完形。G. P2内。
4	須恵器坏	A. 口縁部径(11.2cm)。B. ロクロ成形。C. 体部内外面回転ナデ。D. 片岩粒・白色粒。E. 内外一淡灰褐色。F. 口縁部1/6破片。G. 覆土中。H. やや還元不良。
5	須恵器坏	A. 口縁部径(11.2cm)。B. ロクロ成形。C. 体部内外面回転ナデ。D. 褐色粒・白色粒。E. 内外一淡灰褐色。F. 口縁部1/6破片。G. 覆土中。H. やや還元不良。
6	灰釉陶器壺	A. 口縁部径(6.5cm)。B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデ。D. 褐色粒・白色粒。E. 外一淡緑色・内一淡灰白色。F. 口縁部1/6破片。G. 覆土中。H. 口縁部内外面に淡緑色釉を施す。

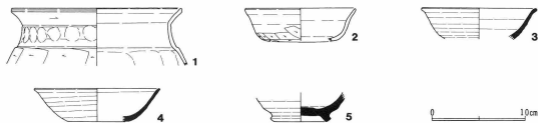
第15号住居跡(第18図)

調査区中央部の南東側寄りに位置し、重複する第8号溝跡に切られている。また、第16号住居跡とも重複しているが、その新旧関係は明らかにできなかった。住居跡の東側半分はすでに削平されており、遺構の遺存状態は極めて悪い。

平面形は、残存する部分から推測すると、方形か長方形を呈していたものと思われる。規模は、南北方向が4.20m、東西方向は1.98mまで測れる。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは西側壁で最高35cmある。北側壁下の一部から西側壁下にかけて、幅20cm・深さ10cmの壁溝が巡っている。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式であるが、全体的に堅くしまっている。

ピットは、残存する住居跡内から1箇所検出されている。P1は、北側壁際に位置する。直径16cmの円形を呈し、床面からの深さは5cm程度である。

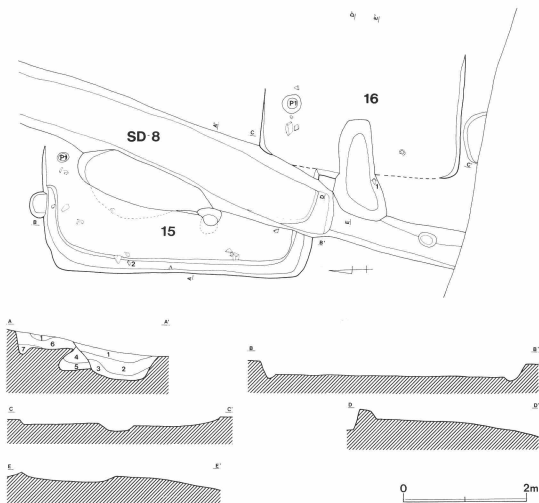
遺物は、覆土中から須恵器や土師器の破片が少量出土しただけである。



第17図 第15号住居跡出土遺物

第15号住居跡出土土器観察表

1	壺	A. 口縁部径(18.0cm)。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ケズリ、内面匱ナデ。D. 赤色粒・白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 口縁部1/4破片。G. 覆土中。
2	坏	A. 口縁部径(11.8cm)。C. 口縁部及び体部内外面ヨコナデ。底部外面ケズリ。D. 赤色粒・白色粒。E. 内外一淡橙褐色。F. 口縁部1/4。G. 覆土中。
3	須恵器坏	A. 口縁部径(12.2cm)。B. ロクロ成形。C. 内外面とも回転ナデ。D. 片岩粒・白色粒。E. 外一淡灰褐色、内一灰褐色。F. 口縁部破片1/4。G. 覆土中。H. やや還元不良。



第18図 第15・16号住居跡

第15号住居跡・第8号溝跡土層説明

〈第8号溝跡〉

- 第1層：淡褐色土層（A軽石を均一に含む。粘性・しまりともない。）
- 第2層：暗茶褐色土層（A軽石・ローム粒子を均一に含む。粘性・しまりともない。）
- 第3層：暗褐色土層（ローム粒子を均一に、ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）
- 第4層：暗褐色土層（ローム粒子を多量に、A軽石を均一に含む。粘性・しまりともない。）
- 第5層：暗褐色土層（A軽石を多量に、ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

〈第15号住居跡〉

- 第6層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
- 第7層：暗褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

4	須恵器 坏	A. 口縁部径13.3cm、器高3.5cm、底部径(6.4cm)。B. ロクロ成形。C. 内外面とも回転ナデ。D. 片岩粒・白色粒。E. 内外-暗灰色。F. 約1/2。G. 覆土中。
5	須恵器 坏	A. 高台部径5.4cm。B. ロクロ成形。高台部貼り付け。C. 内外面とも回転ナデ。底部外面回転糸切り。D. 黒色粒・白色粒。E. 内外-淡灰褐色。F. 底部のみ。G. 覆土中。H. やや還元不良。

第16号住居跡（第18図）

調査区中央部の南東側寄りに位置し、重複する第8号溝跡に切られている。また、第15号住居跡とも重複しているが、その新旧関係は明らかにできなかった。住居跡の東側半分はすでに削平されており、遺構の遺存状態は極めて悪い。

平面形は、残存する部分から推測すると、コーナー部がやや丸みをもつ方形か長方形を呈していると思われる。規模は、南北方向が3.16m、東西方向は1.98mまで測れる。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは西側壁で最高13cmある。床面は、ロームブロックを含む暗黄褐色土を若干埋め戻して平坦にした貼床式であるが、全体的にやや軟弱である。

ビットは、残存する住居跡内から1箇所検出されている。

P1は、北東側コーナー部付近に位置する。直径30cmの円形を呈し、床面からの深さは16cmある。

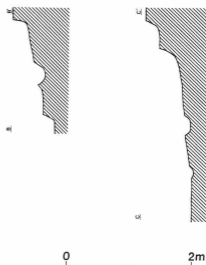
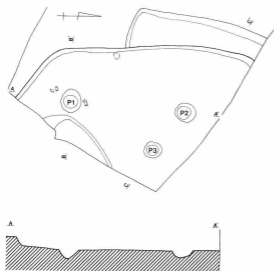
遺物は、覆土中から須恵器や土師器の破片が数片出土しただけである。



第19図 第16号住居跡
出土遺物

第16号住居跡出土土器観察表

1	須恵器 蓋	A. 口縁部径(17.0cm)。B. ロクロ成形。C. 内外面回転ナデの後、天井部外面回転脰ケズリ。D. 片岩粒・白色粒・黒色粒。E. 内外-淡灰白色。F. 口縁部1/6破片。G. 覆土中。H. やや還元不良。
---	----------	---



第20図 第17号住居跡

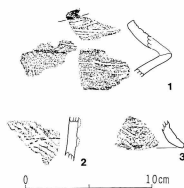
第17号住居跡（第20図）

調査区東側に位置する。住居跡の東側半分は近年の攪乱によって破壊されており、遺構の遺存状態は極めて悪い。

住居跡の形態や規模は不明である。壁は直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で21cmある。床面は、壁際がやや高く、中央部に向かって緩やかに低くなっており、全体的に堅くしまっている。

ピットは、住居内からP1～P3の3箇所検出されている。いずれも直径が25cm～30cmの円形を呈し、床面からの深さが15cm程度の浅いものである。

遺物は、覆土中から縄文時代前期諸磯b式の土器片と石器剥片が少量出土しただけである。



第21図 第17号住居跡
出土遺物

第17号住居跡出土土器観察表

1	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は地文に単節縄文(RL)を横位施文後、竹管状工具を束ねた4本の平行沈線文を施す。D. 赤色粒・白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 破片。G. 覆土中。
2	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は地文に単節縄文(RL)を横位施文後、浮線文(剥離)を施す。D. 赤色粒・白色粒。E. 外一暗褐色、内一茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。
3	台付鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 文様は平行沈線の間に刺突を施した重三角文。D. 白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。

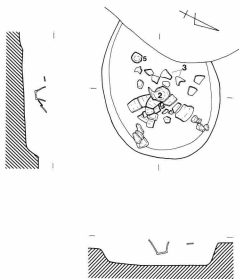
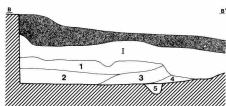
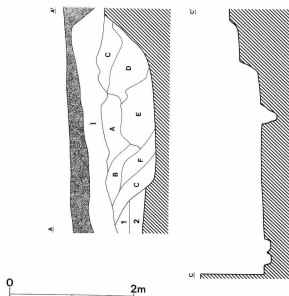
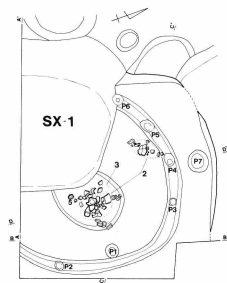
第18号住居跡（第22図）

調査区東側に位置する。重複する第9号住居跡と縄文時代中期の倒木痕に切られており、遺構の遺存状態はあまり良好とは言えない。また、住居跡の東側と南側は調査区外のため、本住居跡の全容は不明である。

平面形は、検出された部分から推測すると、コーナー部の丸みが強い方形か長方形ぎみの形態を呈していたものと思われる。規模は、東西方向が3.28mまで、南北方向が3.08mまで測れる。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは西壁で最高37cmを測る。床面は、ほぼ平坦であるが、壁際が若干高くなっている。住居内には幅20cm・深さ10cm程度の小ピット(P2～P6)を伴う円形に巡る溝が見られるが、おそらく本住居跡構築以前の住居の壁溝と思われる。

ピットは、P1とP7の2箇所が検出されている。P1は、直径20cmの円形を呈し、床面からの深さは10cm程度である。P7は、住居北側の壁際に位置する。直径34cmの円形を呈し、床面からの深さは25cmある。

炉は、住居の中央付近に位置する。南西側を倒木痕に切られているが、おそらく120cm×90cm程度の楕円形を呈していたものと推測される。底面は広く平坦で、床面からの深さは10cm程度である。炉の覆土は、下半がロームブロックや焼土粒子を均一に含む暗茶褐色土で、上半は焼土粒子や炭化粒子を均一に含む黒褐色土である。炉内からは、土器片が比較的多く出土しているが、炉に関係するような施設や炉体土器は見られなかった。



第18号住居跡土層説明

第1層：現耕作土（A軽石混入。）

第1層：黒褐色土層（白色粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

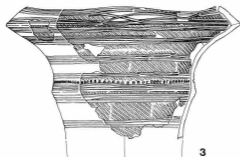
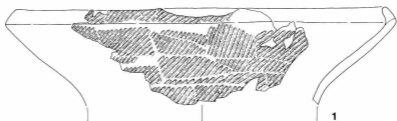
第2層：黒褐色土層（白色粒子・ローム粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第3層：黒褐色土層（白色粒子・ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第4層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

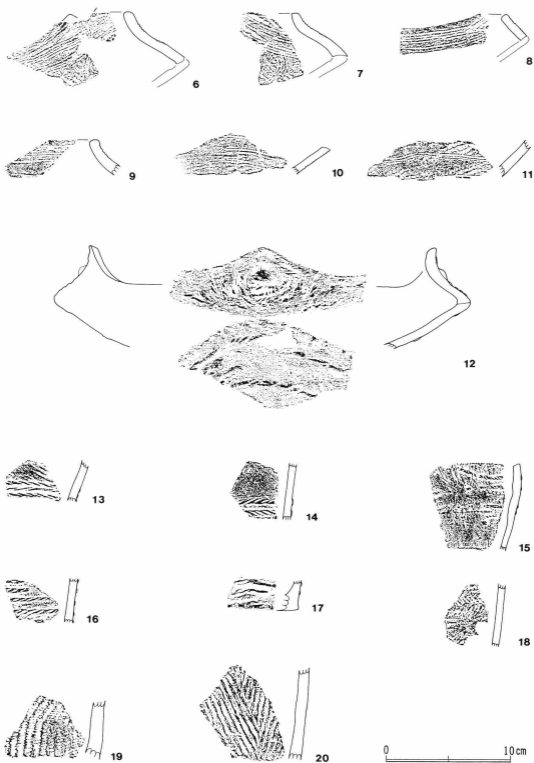
第5層：暗黄褐色土層（ローム粒子を多量に、ロームブロックを微量含む。粘性・しまりともない。）

第22図 第18号住居跡



0 10cm

第23図 第18号住居跡出土遺物(1)



第24图 第18号住居跡出土遺物(2)

遺物は、炉内や覆土中から縄文時代前期諸磯b式の土器片や石器剥片などが出土している。No.2の深鉢は、炉体土器ではないが、その出土状態から見て、炉内に正位に置かれていたものと考えられる。また、第24図のNo.19とNo.20は、縄文時代中期中葉頃のもので、重複する倒木痕に伴うものと考えられる。

第18号住居跡出土土器観察表

1	深鉢	A. 口縁部径(39.0cm)。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 文様は無節縄文を横位に施文。D. 白色粒・赤色粒・黒色粒。E. 外一暗褐色、内一淡褐色。F. 口縁部1/4破片。G. 覆土中。
2	深鉢	A. 口縁部径40.6cm、器高36.3cm、底部径11.7cm。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 文様は器面全面に節の大きな単節縄文(R L)を横位に施文しているが、器面の1/4ほどに無節縄文を施している。口縁部には棒状の貼付浮文が4単位見られる。D. 白色粒・小石。E. 外面上半一暗茶褐色、外面下半一淡橙褐色、内一黒褐色。F. 約3/4。G. 炉内、床面付近。
3	深鉢	A. 口縁部径(20.4cm)。B. 粘土紐積み上げ成形。C. 文様は地文に単節縄文(R L)を横位に施文後、竹管状工具による平行沈線文を口縁部から胴部にかけて数段施す。胴部中途には同一工具を回転させた円形刺突文を横位に巡らせる。D. 白色粒・片岩粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 約1/3。G. 炉内。
4	深鉢	A. 底部径5.6cm。B. 底部円盤上での粘土紐積み上げ成形。C. 胴部底部とも内外面ナデ。D. 白色粒。E. 外一暗褐色、内一黒褐色。F. 底部のみ。G. 覆土中。
5	深鉢	A. 底部径8.0cm。B. 底部円盤上での粘土紐積み上げ成形。C. 内外面ともナデ。文様は横位貼付隆帯上にキザミを施す。D. 白色粒・片岩粒。E. 内外一明茶褐色。F. 底部のみ。G. 覆土中。
6	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は地文に単節縄文(R L)を施文後、竹管状工具を束ねた4本の平行沈線文を施す。D. 赤色粒・白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。H. No.7・9と同一個体。
7	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は地文に単節縄文(R L)を施文後、竹管状工具を束ねた4本の平行沈線文を施す。D. 赤色粒・白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。H. No.6・9と同一個体。
8	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は竹管状工具を束ねた4本の平行沈線文を施す。D. 赤色粒・白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。
9	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は地文に単節縄文(R L)を施文後、竹管状工具を束ねた4本の平行沈線文を施す。D. 赤色粒・白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。H. No.6・7と同一個体。
10	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は地文に単節縄文(L R)を横位に施文後、竹管状工具による2本の平行沈線文を施す。D. 片岩粒・白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。H. No.11と同一個体。
11	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は地文に単節縄文(L R)を横位に施文後、竹管状工具による2本の平行沈線文を施す。D. 片岩粒・白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。H. No.10と同一個体。
12	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は地文に単節縄文(R L)を横位に施文後、粘土紐の貼り付けによる浮線文を施す。D. 片岩粒・白色粒・小石。E. 外一暗茶褐色、内一淡茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。
13	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は地文に単節縄文(R L)を横位に施文後、粘土紐上に線状の長めのキザミをもつ浮線文を施す。D. 赤色粒・白色粒。E. 外一暗褐色、内一淡褐色、内一黒褐色。F. 破片。G. 覆土中。
14	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は地文に単節縄文(R L)を横位に施文後、粘土紐上にキザミをもつ浮線文を施す。D. 赤色粒・白色粒。E. 内外一暗褐色。F. 破片。G. 覆土中。

15	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は地文はなく、粘土紐上にキザミや指突をもつ浮線文を施す。D. 片岩粒・赤色粒・白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。
16	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は地文はなく、粘土紐上に無節縄文を転がした浮線文を施す。D. 片岩粒・白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。H. №17と同一個体。
17	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は地文はなく、粘土紐上に無節縄文を転がした浮線文を施す。D. 片岩粒・白色粒。E. 内外一明茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。H. №16と同一個体。
18	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は地文に単節縄文を施文後、横位に絞杖状のキザミを施す。D. 片岩粒・赤色粒。E. 外一暗褐色、内一黒褐色。F. 破片。G. 覆土中。
19	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は単節縄文(RL)を施す。D. 白色粒。E. 外一明茶褐色、内一黒色。F. 破片。G. 覆土中。H. 倒木痕(SX-1)からの混入と考えられる。
20	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は単節縄文(RL)を施す。D. 赤色粒・白色粒。E. 外一明茶褐色、内一淡茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。H. 倒木痕(SX-1)からの混入と考えられる。

2. 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡(第25図)

調査区中央部の西側寄りに位置し、北東側には第2号掘立柱建物跡が、西側にはピットによる第1号柵列跡が近接している。建物跡の北東側は第8号住居跡と重複しており、それによって一部の側柱穴上面を切られている。

建物跡の形態は、南北方向が3間、東西方向が2間の長方形を呈する側柱式である。規模は、南北方向の桁行側が7.05m、東西方向の梁行側が4.60mを測る。柱心間は、桁行側が1間2.35m・梁行側が2.30mの等間隔である。建物跡の桁行方向は、N-2°-Wのほぼ真北を向いている。

柱穴の形態は、長さ50cm~90cmの楕円形もしくは不整形円形を呈するものが多いが、P1・P3・P4のように、長方形や方形ぎみの形態のものも見られる。柱穴の深さは、建物跡が東側に傾斜する斜面に建てられているため、全体的に見た目は建物の東側側柱穴は浅く、西側側柱穴は深くなっている。覆土は、ロームブロックや焼土粒子を含む暗茶褐色土を主体にし、柱痕は見られなかった。

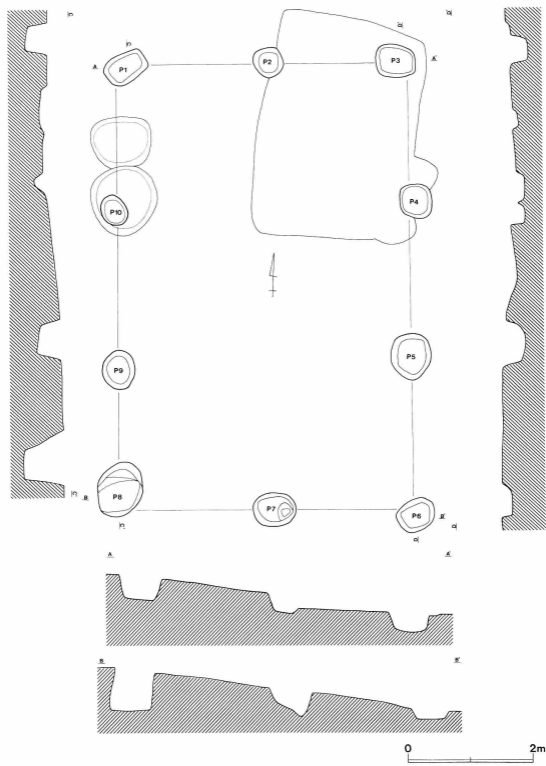
遺物は、柱穴覆土中から9世紀代の須恵器や土師器の破片が、少量出土しただけである。

第2号掘立柱建物跡(第26図)

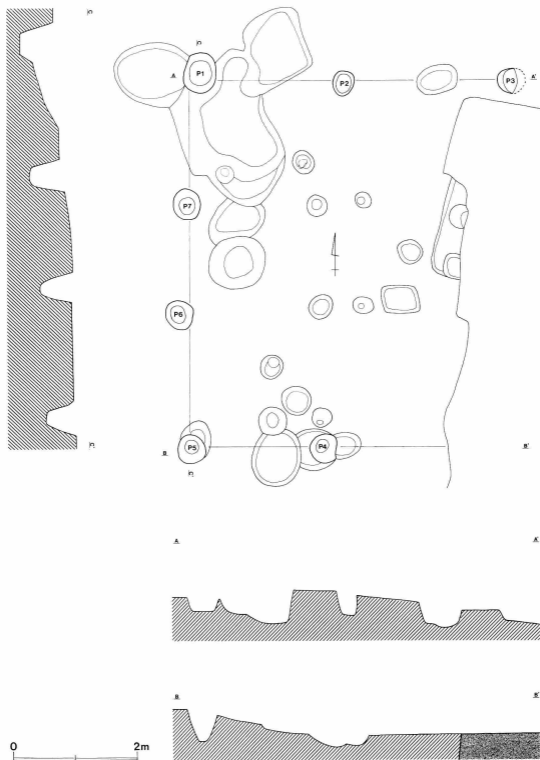
調査区中央部の北側寄りに位置し、南西側には第1号掘立柱建物跡が、東側には第3号掘立柱建物跡が近接している。本建物跡は、建物の東側を近年の掘削によってすでに破壊されているため、その全容は不明である。なお、第13号住居跡とは重複関係にあるものと考えられるが、その新旧関係は不明である。

建物跡の形態は、第1号掘立柱建物跡と同じく、南北方向が3間、東西方向が2間の長方形を呈する側柱式と推測される。規模は、南北方向がほぼ6mあり、東西方向はP3を本建物跡の東側側柱穴の痕跡と考えると、5m程度ではないかと思われる。柱心間は、南北方向の桁行側が1間ほぼ2m位で、東西方向の梁行側が1間約2.5m位の等間隔と思われる。建物跡の桁行方向は、ほぼ真北を向いている。

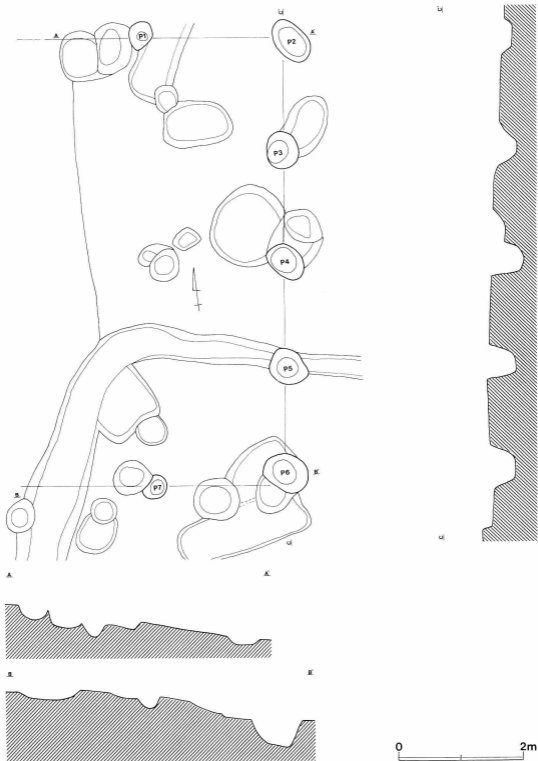
柱穴は、長さ40cm~65cmの円形や楕円形ぎみのものが多い。柱穴の深さは、建物の西側側柱穴で



第25图 第1号掘立柱建物跡



第26图 第2号掘立柱建物跡



第27图 第3号掘立柱建物跡

50cm～60cmある。覆土は、ローム粒子を含む黒褐色土を主体にし、柱痕は見られなかった。

遺物は、柱穴覆土中や柱穴周辺から、9世紀代を主体とする須恵器や土師器の破片が、少量出土しただけである。

第3号掘立柱建物跡（第27図）

調査区中央部のやや北側寄りに位置し、西側には第2号掘立柱建物跡が、南側にはピットによる第2号柵列跡が近接している。本建物跡は、西側を近年の攪乱によってすでに破壊されているため、その全容は不明である。また、柱穴の一部を後世の第7号溝跡と第12号溝跡に切られている。

建物跡の形態は、南北方向が4間、東西方向が2間以上の長方形に近い形態を呈するものと思われる。規模は、南北方向は7.20mである。柱心間は、南北方向が1間ほぼ1.80mの等間隔で、東西方向はP1～P2間とP6～P7間の1間が約2.10mである。建物跡の南北方向は、N-7°-Eを向いている。

柱穴は、P2～P6の建物東側の側柱穴は長さ60cm～75cmの不整形円形か楕円形を呈しているが、P1とP7の南北両側の側柱穴は、直径40cm程度の規模の小さな円形を呈している。柱穴の深さは、建物の東側側柱穴で20cm～50cmあり、P1とP7の南北両側の側柱穴は20cm～30cmである。覆土は、ローム粒子を含む黒褐色土を主体にし、柱痕は見られなかった。

遺物は、柱穴覆土中や柱穴周辺から、8世紀後半～10世紀代の須恵器や土師器の破片が、少量出土しただけである。

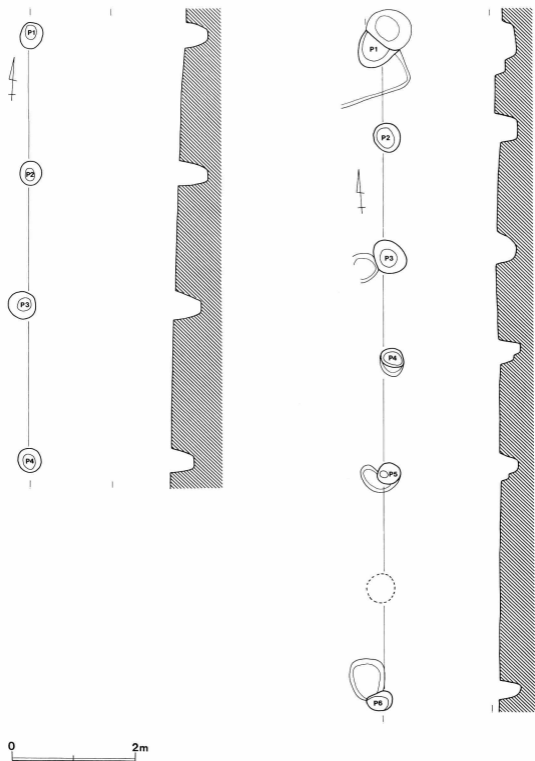
3. 柵列跡

第1号柵列跡（第28図）

調査区の西側に位置し、東側には第1号掘立柱建物跡が近接している。本柵列跡は、ほぼ南北方向の直線上に同規模のピットが4個並んだものであるが、その南側延長はさらに調査区外に延びる可能性もある。その方向は東側に近接する第1号掘立柱建物跡の桁方向とほぼ一致している。柱心間は、2.20m程度のほぼ等間隔である。柱穴は、いずれも直径40cm程度の円形を呈し、確認面からの深さも40cm～50cmで比較的揃っている。覆土は、ローム粒子を均一に含む黒褐色土を主体にしている。遺物が何も出土していないため、明確な時期は不明であるが、覆土の状態より古代のものと推測される。

第2号柵列跡（第28図）

調査区中央部の南側寄りに位置し、重複する第3号掘立柱建物跡と第16号土壇に、柱穴の一部を切られている。本柵列跡は、ほぼ南北方向に同規模のピットが列状に並んだものであるが、その南側延長はさらに調査区外に延びる可能性もある。柱心間は、やや不揃いで1.30m～1.80mまでである。柱穴は、長さ35cm～50cmの円形を呈し、確認面からの深さはいずれも35cm程度で揃っている。遺物が何も出土していないため、明確な時期は不明であるが、覆土の状態より古代のものと推測される。

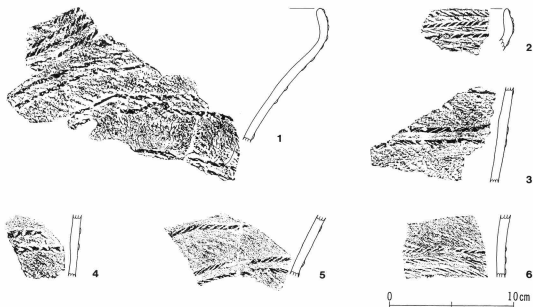


第28圖 柵 列 跡

4. 土 壌

第13号土壌 (第33図)

調査区の東端付近に位置し、土壌の北側の一部を第9号住居跡と第9号溝跡に切られている。平面形は楕円形ぎみの形態を呈し、規模は南北方向が2.04m、東西方向が1.26mを測る。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で26cmある。底面は、広く平坦であるが、東側に向かってやや傾斜している。遺物は、覆土中から縄文時代前期諸磯b式の深鉢の破片が比較的多く出土している。



第29図 第13号土壌出土遺物

第13号土壌出土土器観察表

1	深 鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は地文に単節縄文(R L)を横位に施した後、粘土紐貼り付けによる浮線文(口縁部はキザミ、胴部は縄文)を施す。D. 片岩粒・赤色粒・白色粒。E. 外一暗茶褐色、内一茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。
2	深 鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は地文に単節縄文(R L)を横位に施した後、粘土紐貼り付けによるキザミをもつ浮線文を施す。D. 白色粒。E. 内外一茶褐色。F. 口縁部破片。G. 覆土中。
3	深 鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は地文に単節縄文(R L)を施した後、粘土紐貼り付けによるキザミをもつ浮線文を施す。D. 片岩粒・白色粒。E. 外一茶褐色、内一暗茶褐色。F. 胴部破片。G. 覆土中。
4	深 鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は地文に単節縄文(R L)を横位に施した後、粘土紐貼り付けによるキザミをもつ浮線文を施す。D. 白色粒。E. 外一茶褐色、内一暗褐色。F. 胴部破片。G. 覆土中。

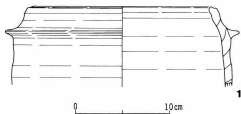
5	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は地文に単節縄文(R L)を横位に施文後、粘土紐貼り付けによるキザミをもつ浮線文を施す。D. 赤色粒・白色粒・黒色粒。E. 内外一淡褐色。F. 胴部破片。G. 覆土中。H. №6と同一個体。
6	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は地文に単節縄文(R L)を横位に施文後、粘土紐貼り付けによるキザミをもつ浮線文を施す。D. 赤色粒・白色粒・黒色粒。E. 内外一淡褐色。F. 胴部破片。G. 覆土中。H. №5と同一個体。

第14号土壙 (第33図)

調査区の東端付近に位置し、北東側約1mには第13号土壙が近接している。平面形は比較的整った円形を呈し、規模は東西方向が1.06m、南北方向が1.00mを測る。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で30cmある。底面は、広くほぼ平坦である。遺物は、覆土中より縄文時代前期諸儀b式の浅鉢と思われる破片が1片出土しただけである。

第15号土壙 (第33図)

調査区中央部の北側寄りに位置し、重複する第14号住居跡を切っている。平面形は整った長方形を呈し、規模は南北方向が3.42m・東西方向が90cmを測る。壁は、緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは14cmある。底面は広く平坦であるが、東側に向かってやや傾斜している。遺物は、覆土



第30図 第15号土壙出土遺物

中から羽釜や土師器の破片が出土しているが、重複する第14号住居跡から混入した可能性が高い。

第15号土壙出土土器観察表

1	羽釜	A. 口縁部径(20.0cm)。B. 粘土紐積み上げ後ロクロ調整。鈎貼り付け。C. 内外面とも回転ナデ。D. 片岩粒・赤色粒・白色粒。E. 外一茶褐色、内一淡茶褐色。F. 1/8破片。G. 覆土中。H. 酸化焼成。
---	----	---

第16号土壙 (第33図)

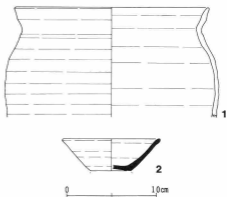
調査区の中央部付近に位置し、重複する第3号掘立柱建物跡と第2号柵列跡の柱穴を切っている。平面形は、コーナー部の丸み強い長方形を呈し、規模は東西方向が2.08m・南北方向が80cmを測る。壁は、直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは22cmある。底面は広く平坦であるが、東側に向かって緩やかに傾斜している。出土遺物はなく、時期は不明である。

第17号土壙 (第33図)

調査区東側の北側寄りに位置し、東側には第17号住居跡が近接している。平面形はコーナー部がやや丸みをもつ方形ぎみの形態で、規模は南北方向1.20m・東西方向1.24mを測る。壁は直線的に立ち上がり、確認面からの深さは最高で28cmある。底面は広く平坦であるが、東側に向かってやや傾斜している。出土遺物はなく、時期は不明である。

第18号土坑（第33図）

調査区の中央部に位置する。第12号住居跡と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は楕円形か不整形円形ぎみの形態を呈している。規模は南北方向が74cm、東西方向は60cmまで測れる。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で26cmある。底面は広く平坦であるが、南側に向かって緩やかに傾斜している。覆土は、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色土を主体としている。遺物は、覆土中から10世紀代の土器の破片が少量出土しただけである。



第31図 第18号土坑出土遺物

第18号土坑出土土器観察表

1	壺	A. 口縁部径(21.4cm)。B. ロクロ成形。C. 内外面とも回転ナデ。D. 赤色粒・白色粒・黒色粒。E. 内外一明橙褐色、肉一淡灰色。F. 1/6破片。G. 覆土中。H. 酸化焰焼成。外面煤付着。
2	須恵器 坏	A. 口縁部径(10.8cm)、器高3.5cm、底部径(4.4cm)。B. ロクロ成形。C. 内外面とも回転ナデ。底部外面回転系切り。D. 白色粒、小石。E. 内外一暗灰色。F. 1/3破片。G. 覆土中。

第19号土坑（第33図）

調査区中央部付近に位置し、重複する第20号土坑に切られている。平面形は直径1.50m程度の円形を呈している。壁は緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは18cmある。底面は広く平坦であるが、北東方向に向かってやや傾斜している。覆土は、ローム粒子や炭化粒子を含む黒褐色土と暗茶褐色土である。遺物は、覆土中から9世紀後半を主体とする土師器や須恵器の破片が少量出土しただけである。



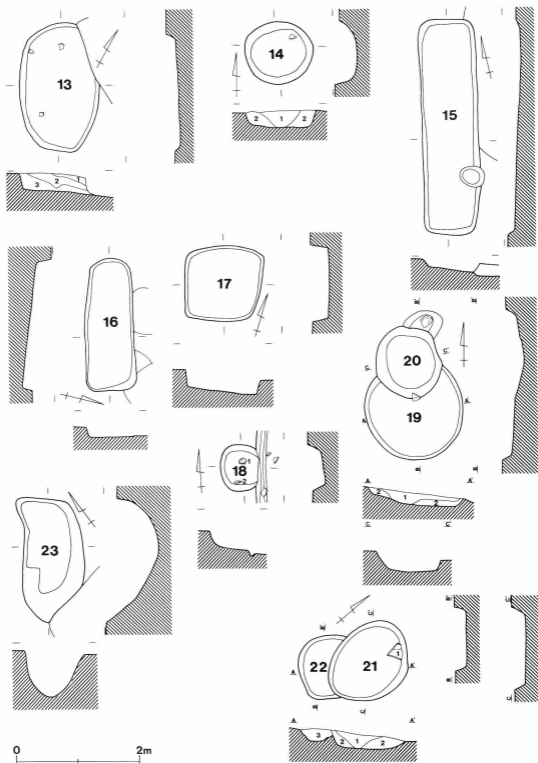
第32図 第19号土坑
出土遺物

第19号土坑出土土器観察表

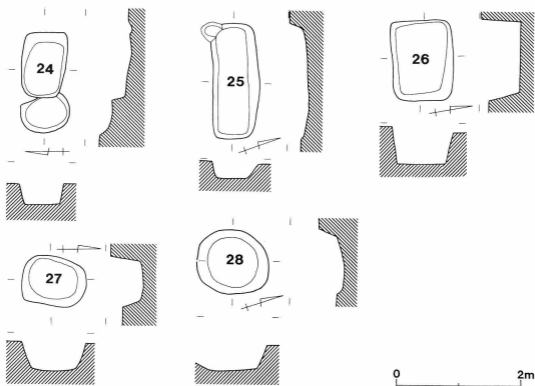
1	須恵器 皿	A. 口縁部径(14.4cm)。B. ロクロ成形。C. 内外面とも回転ナデ。D. 白色粒。E. 外一灰色、内一暗灰色。F. 口縁部1/7破片。G. 覆土中。
2	須恵器 坏	A. 底部径(6.6cm)。B. ロクロ成形。C. 内外面とも回転ナデ。底部外面回転系切り。D. 白色粒。E. 内外一淡灰色。F. 底部1/3破片。G. 覆土中。

第20号土坑（第33図）

調査区中央部付近に位置し、重複する第19号土坑を切っている。平面形は円形に近い形態を呈している。規模は南北方向が1.12m、東西方向が1.04mを測る。壁は直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で31cmある。底面は広くやや丸みをもっている。覆土は、ローム粒子や焼土粒子を含む暗褐色土を主体としている。遺物は、覆土中より10世紀代の羽釜や坏などの破片が少量出土しただけである。



第33圖 土 壙 (1)



第33図 土 壺 (2)

第13号土壺土層説明

- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子・焼土粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第2層：黒褐色土層（焼土粒子・炭化粒子を均一に、ローム粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）
- 第3層：暗褐色土層（ロームブロック・焼土粒子を均一に、炭化粒子・ローム粒子を微量含む。粘性はなく、しまりを有する。）

第14号土壺土層説明

- 第1層：黒色土層（白色粒子・ローム粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
- 第2層：黒褐色土層（ロームブロックを均一に、ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第19号土壺土層説明

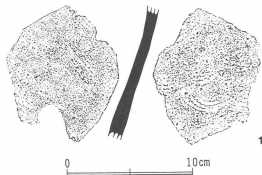
- 第1層：黒褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
- 第2層：暗茶褐色土層（ローム粒子を多量に、炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第21・22号土壺土層説明

- 〈第21号土壺〉
- 第1層：暗褐色土層（ローム粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
- 第2層：暗茶褐色土層（ローム粒子を均一に、焼土粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）
- 〈第22号土壺〉
- 第3層：暗茶褐色土層（ローム粒子を多量に、ロームブロック・炭化粒子を微量含む。粘性・しまりともない。）

第20号土壌出土土器観察表

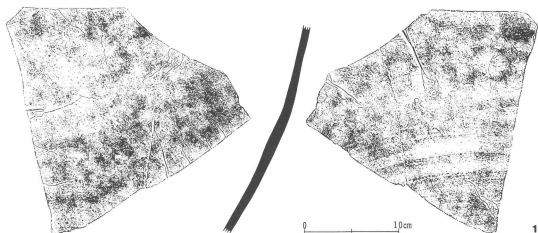
1	須恵器 甕	B. 粘土紐積み上げ後叩き。C. 胴部外面ハケ、胴部内面ナデ。D. 褐色粒・白色粒。E. 外-暗灰褐色、内-淡灰褐色。F. 胴部破片。G. 覆土中。H. 内面に青海波文の当道具痕あり。
---	----------	--



第35図 第20号土壌出土遺物

第21号土壌 (第33図)

調査区中央部のやや北西側寄りに位置し、重複する第22号土壌を切っている。平面形はやや不整な楕円形ぎみの形態を呈している。規模は南北方向が1.42m・東西方向が1.10mを測る。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で24cmある。底面は広く平坦である。遺物は、覆土中から須恵器甕の大型胴部破片が1片出土しただけである。



第36図 第21号土壌出土遺物

第21号土壌出土土器観察表

1	須恵器 甕	B. 粘土紐積み上げ後叩き。C. 胴部外面回転ナデの後斜方向のナデ。胴部内面上半ナデ、下半回転ナデ。D. 白色粒。E. 外-暗灰色、内-灰色。F. 胴部破片。G. 覆土中。H. 胴部外面は細い平行叩き、内面は丸い当道具の痕跡あり。
---	----------	---

第22号土壌 (第33図)

調査区中央部のやや北西側寄りに位置し、重複する第21号土壌に切られている。平面形は不明であるが、規模は北西～南東方向が1m、北東～南西方向は85cmまで測れる。壁は緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは最高で20cmある。底面は広いがやや凹凸がある。覆土は、ローム



第37図 第22号土壌
出土遺物

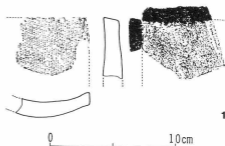
粒子を含む黒褐色土を主体にしている。遺物は、覆土中から土師器の破片がごく少量出土しただけである。

第22号土壌出土土器観察表

1	坏	A. 口縁部径(13.0cm)。C. 口縁部外面及び内面ヨコナデ。体部外面ナデ。底部外面ケズリ。D. 白色粒、黒色粒。E. 内外-暗茶褐色。F. 1/5破片。G. 覆土中。
---	---	--

第23号土壌 (第33図)

調査区中央部の南側寄りに位置し、重複する第11号住居跡に切られている。平面形はやや長細い不整形を呈している。規模は北東～南西方向が1.96m、北西～南東方向が98cmある。壁は緩やかに立ち上がり、確認面からの深さは72cmある。底面は丸みをもって狭く、いわゆる船底状を呈している。覆土は、ローム粒子と白色粒子を均一に含む暗茶褐色土を主体にしている。遺物は、覆土中から古代の平瓦の破片が1片出土しただけである。



第38図 第23号土壌出土遺物

第23号土壌出土土器観察表

1	平瓦	A. 残存長(4.7cm)、残存幅(6.5cm)。B. 叩き。C. 凸面ナデ。凹面は布目瓦痕を残す。側面及び端面ナデ。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外-淡茶褐色。F. 破片。G. 覆土中。H. 酸化焰焼成。
---	----	---

第24号土壌 (第34図)

調査区中央部の南側寄りに位置し、東側は第12号住居跡と隣接している。平面形は長方形ぎみの形態を呈している。規模は東西方向が1.03m、南北方向が71cmを測る。壁は直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で24cmある。底面は広く平坦である。覆土はロームブロックと炭化粒子を含む暗褐色土を主体にしている。遺物は、何も出土しなかった。

第25号土壌 (第34図)

調査区中央部の南端に位置し、北側には第10号住居跡が近接している。平面形はコーナー部がやや丸みをもつ比較的整った長方形を呈している。規模は東西方向が1.84m、南北方向が74cmを測る。壁は直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは26cmある。底面は広く平坦である。遺物は、何も出土しなかった。

第26号土壌 (第34図)

調査区の西端に位置する。平面形は比較的整った長方形を呈している。規模は東西方向が1.28m、南北方向が98cmを測る。壁は直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは62cmある。底面は広く平坦である。覆土は、上半がローム粒子と炭化粒子を含む暗褐色土で、下半がロームブロックを均一に含む暗黄褐色土である。遺物は、何も出土しなかった。

第27号土壌（第34図）

調査区中央部の北側寄りに位置し、北側には第14号住居跡や第15号土壌が近接している。平面形はコーナー部の丸み強い長方形ぎみの形態を呈している。規模は南北方向が1.02m、東西方向が78cmを測る。壁は直線的にやや傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは46cmある。底面は広くほぼ平坦であるが、若干丸みをもっている。覆土は、炭化粒子や焼土粒子を均一に含む黒褐色土を主体にしている。遺物は、何も出土しなかった。

第28号土壌（第34図）

調査区の東端付近に位置し、縄文時代中期の倒木痕を切っている。平面形は比較的整った円形を呈し、規模は1.13m×1.02mを測る。壁は、直線的に傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で42cmある。底面は、広くやや丸みをもっている。覆土は、ローム粒子や炭化粒子を含む黒褐色土である。遺物は、覆土中から9世紀頃の土師器甕の破片が1片出土しただけである。

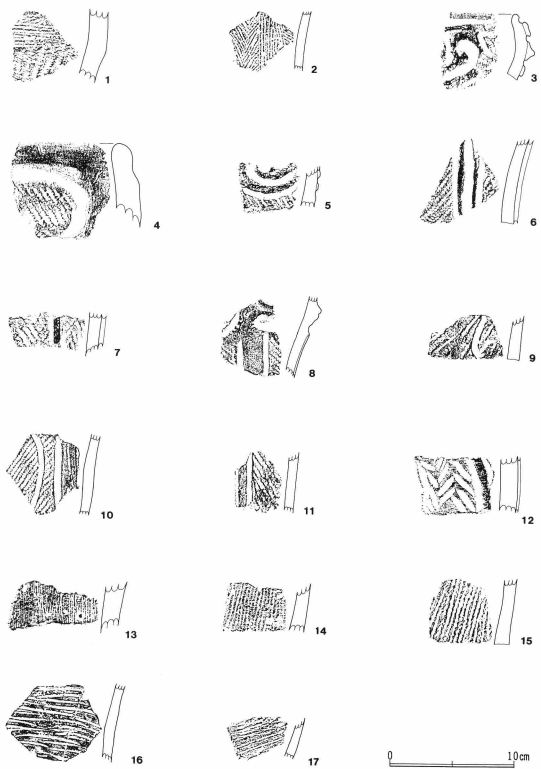
5. 溝 跡（第3図）

B地点では、調査区内から6条の溝跡（第7～12号溝跡）が検出されているが、これらはいずれもその覆土中にA軽石を多量に含む近世後半以降のものである。調査区中央部付近に位置する第7号溝跡・第8号溝跡と第10～12号溝跡は、畑などの区画溝と考えられるが、小規模で均一な形態の第10号溝跡と第11号溝跡は、トレンチャー等による機械掘りの溝と考えられる。調査区東端に位置する第9号溝跡は、地形の等高線に直交するもので、東に行くほど溝が深くなっており、あるいは人工的な溝ではなく、自然の流水によって形成された溝の可能性もある。

6. その他の遺物（第39図）

B地点表探・出土遺物観察表

1	深	鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は上半に節の小さな捻紐の側面圧痕文、下半に節の大きな単節縄文(LR)を施す。D. 白色粒、繊維混入。E. 内外一暗黄褐色、肉一黒褐色。F. 胴部破片。G. 第18号住居跡炉内覆土。
2	深	鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は竹管状工具による沈線文(縦方向の沈線の後羽状沈線)を施す。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色、肉一黒褐色。F. 胴部破片。G. 表探。
3	深	鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は地文に単節縄文(RL)を施文後、隆帯と沈線による渦巻文や区画文を施す。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 口縁部破片。G. 表探。
4	深	鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 外面ミガキ。内面ナデ。文様は隆帯と沈線による区画文の中に単節縄文(RL)を充填する。D. 赤色粒、白色粒。E. 外一黒褐色、内一淡褐色。F. 口縁部破片。G. 第9号住居跡覆土中。
5	深	鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は地文に撚糸文を施文後、隆帯と沈線による渦巻文を施す。D. 赤色粒、白色粒。E. 内外一淡褐色、肉一黒褐色。F. 胴部破片。G. 第9号住居跡覆土中。
6	深	鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は地文に単節縄文(RL)を縦位施文後、粘土紐貼り付けによる隆帯文を施す。D. 白色粒。E. 外一暗褐色、内一暗橙褐色。F. 胴部破片。G. 第2号掘立柱建物跡周辺。



第39圖 B 地点表探遺物

7	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は地文に単節縄文(R L)を縦位施文後、粘土紐貼り付けによる隆帯文を施す。D. 白色粒。E. 内外一黒褐色。F. 胴部破片。G. 第3号掘立柱建物跡。
8	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は地文に単節縄文(R L)を縦位施文後、沈線文を施し、胴部縦位沈線間の縄文を磨り消す。D. 片岩粒・白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 胴部破片。G. 第10号住居跡覆土中。
9	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は地文に付加条縄文を施文後、沈線文を施す。D. 片岩粒・白色粒。E. 外一淡茶褐色、内一暗茶褐色。F. 胴部破片。G. 表探。
10	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は地文に単節縄文(R L)を縦位施文後、磨り消しを伴う縦方向の区画沈線と蛇行沈線を施す。D. 白色粒。E. 外一淡茶褐色、内一暗褐色。F. 胴部破片。G. 第9号住居跡覆土中。
11	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は地文に単節縄文(R L)を縦位施文後、磨り消しを伴う縦方向の区画沈線を施す。D. 白色粒。E. 外一明茶褐色、内一暗褐色。F. 胴部破片。G. 3号掘立柱建物跡周辺。
12	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 内面ナデ。文様は隆帯による大形渦巻文の中に、「ハ」の字状の列点文を充填。D. 片岩粒・白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 胴部破片。G. 第18号住居跡覆土中。
13	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 外面縦方向のハケ、内面ナデ。D. 赤色粒・白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 胴部破片。G. 第9号住居跡覆土中。
14	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 外面燃糸文、内面ナデ。赤色粒・白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 胴部破片。G. 第9号住居跡覆土中。
15	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 外面燃糸文、内面ナデ。片岩粒・白色粒。E. 内外一暗茶褐色。F. 胴部破片。G. 第9号住居跡覆土中。
16	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 外面太い条痕文、内面ナデ。赤色粒・白色粒。E. 内外一淡茶褐色。F. 胴部破片。G. 表探。
17	深鉢	B. 粘土紐積み上げ成形。C. 外面細い条痕文、内面ナデ。D. 白色粒。E. 内外一淡褐色。F. 胴部破片。G. 表探。

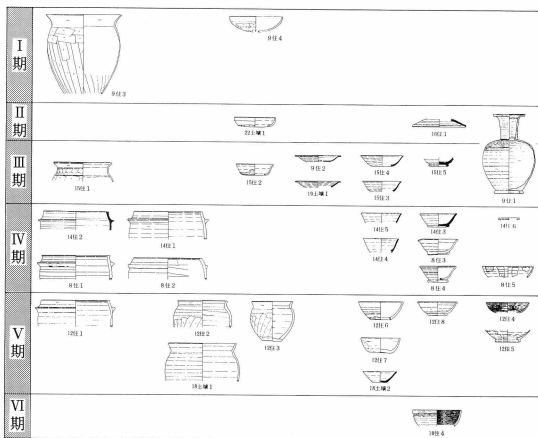
第V章 ま と め — 奈良・平安時代の土器と遺構 —

今回のB地点の調査では、調査区内で奈良時代から平安時代の住居跡や建物跡が検出されており、B地点の北側に近接するA地点や若干離れたC地点の様相からすると、本遺跡は丘陵東側斜面の比較的広範囲に住居や建物が展開する集落跡のようである。本集落の全体的な様相や動態については、未だ本遺跡全体に対する発掘調査の実施面積が狭く、また他地点の整理作業も進んでいないため、具体的に検討することはもちろんのこと推察することも困難な状況である。そのため、ここでは今回報告したB地点の奈良・平安時代の土器と遺構の変遷についてその概略を述べ、本遺跡における該期集落の様相の一端を示すことでまとめたい。

1. 奈良・平安時代の土器

B地点の該期の遺構から出土した土器は、遺構の遺存状態を反映してか比較的少なく、また破片資料が大半である。そのため、明確なことは不明であるが、それらの時期は8世紀中頃から10世紀末頃までのもので、概ね以下のI～VI期に分けて考えることができる(第40図)。

I期の土器は、第9号住居跡のカマド内から出土した土師器の甕と坏である。第9号住居跡No.3の甕は、口縁部は薄く緩やかに外反する形態で、胴部は薄く最大径を上位にもち、すでに短胴化が



第40図 B地点出土の奈良・平安時代の土器

進行した形態である。第9号住居跡№4の坏は、法量がやや大ぶりのタイプで、口縁部がやや長めに直立し、体部はまだ若干深めの形態である。

Ⅱ期の土器は、ごく少量でいずれも小破片のため明確ではないが、第16号住居跡出土の須恵器蓋と第22号土壙出土の土師器坏が、概ね該期に該当しよう。第16号住居跡出土の須恵器蓋は、口径が17cm前後と推定される比較的大ぶりのものである。第22号土壙出土の土師器坏は、Ⅰ期の坏に比べると、体部の扁平化がかなり進行した形態のものである。

Ⅲ期の土器は、第15号住居跡出土の土器群が該当する。№1の土師器甕は、典型的な「コ」の字状の口縁で、口唇部外面に凹線状の窪みのある平坦面をもつものである。№2の土師器坏は、やや小ぶりで平底ぎみの底部を形成し、器高がやや高く、口縁部が外傾する形態のものである。№3と№4の須恵器坏は、体部が内湾ぎみに開き、口唇部は短く外反する。№5の高台付碗は、高台がすでに低く太い形態になっている。また、第9号住居跡№2や第19号土壙№1の器高が低い皿形の須恵器も、おそらく該期のものと思われる。

Ⅳ期の土器は、第8号住居跡と第14号住居跡出土の土器群が該当する。当地域における該期の煮沸具には、一般的に終末段階の「コ」の字状口縁の土師器甕も見られるが、本遺跡B地点の住居跡では羽釜が主体的である。羽釜は、還元焙焼成のしっかりした須恵質のものや還元不良の軟質のものがあ、口縁部が内傾して口唇部の内外が肥厚し、比較的シャープな作りのものが多いようである。坏や高台付碗(坏)は、Ⅲ期のものに比べると法量が小さくなり、還元不良や酸化焙焼成のものが多く見られる。当地域では土師器坏も該期には存在するが、一般的集落では量的に減少するようで、あまり見られなくなる。おそらくこれまでの土師器坏は、この頃から中世のかわらけ(土師器皿)に通じるような性格のものに変わりはじめるものと推測され、その使用が日常の使用から特定の目的や役割に限定されてくるのではないと思われる。

Ⅴ期の土器は、第12号住居跡やそれと重複する第18号土壙出土の土器群が該当する。煮沸具は、一般的には羽釜が主体的であるが、その他にはこれまでの伝統的な「コ」の字状口縁の系譜を引く土師器甕に変わって、大・中・小の法量差のある酸化焙焼成のロクロ整形甕が見られるようになる。この甕は、ロクロ整形の後に胴部下半に縦方向のケズリを加えるものが一般的であるが、その形態は多様である。このロクロ整形甕の出自や系譜については検討を要するが、当地域においては以後長期にわたって安定して継続するものではなく、比較的短期間しか存続しない甕のようである。坏や高台付碗(坏)は、前段階と同様にロクロ使用の酸化焙焼成のものが主体である。これまでの伝統的な土師器坏は、一般的な普通の集落では、この時期以降はほとんど見られなくなる。

Ⅵ期の土器は、第10号住居跡の覆土中から出土した内面黒色処理の碗だけである。第10号住居跡から出土した他の羽釜については、該期まで下るものか明確ではない。

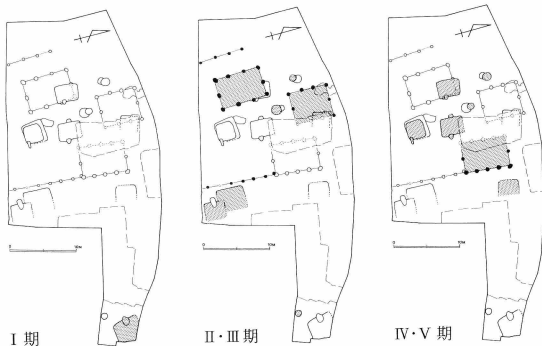
以上のように、本報告のB地点から出土した奈良・平安時代の土器について、大雑把ながらⅠ～Ⅵ期に分けて考えたが、これらの各期の年代の想定については、当地域周辺の該期土器の編年を各遺跡毎に手がけた諸氏による年代比定(赤熊1988・2000、篠崎1992、小澤1996、田中・末木1997)を参照すると、概ねⅠ期が8世紀の中頃、Ⅱ期が8世紀後半～9世紀前半、Ⅲ期が9世紀後半、Ⅳ期が10世紀前葉、Ⅴ期が10世紀中葉、Ⅵ期が10世紀後葉～末以降になるものと思われる。

2. 遺構の変遷

B地点で検出された奈良・平安時代の遺構は、第Ⅲ章で述べたように、住居跡9軒・掘立柱建物跡3棟・土壇7基・柵列跡2基である。これらの遺構は、前節で該期の土器を8世紀中頃～10世紀末頃までのⅠ～Ⅵ期に分別したように、比較的長期間の時間差を認めることができ、長期にわたって営まれた集落の累積した姿であることが知られる。しかしながら、全体的に遺構の遺存状態が悪く、また出土土器も比較的少量であるため、個々の遺構の厳密な時期比定については、非常に困難なものが多い。そのため、B地点での遺構の時期的な変遷については、第41図に示した程度でしか解らないが、本遺跡における該期集落の主体となる時期は、他地点の様相から見ても、おそらくⅢ期以降の9世紀後半からほぼ10世紀いっばいの期間と考えられる。

Ⅰ期は、B地点の調査区南端で検出された第9号住居跡だけであるため、本遺跡における該期集落の様相についてはよくわからないが、他の地点では該期の遺構は希薄であり、比較的小規模な集落を形成していたのではないと思われる。

Ⅱ～Ⅲ期の主な遺構には、第15・16号住居跡と第1・2号掘立柱建物跡や第1・2号柵列跡などが該当すると考えられる。Ⅲ期の第15号住居跡以外の遺構は、その出土遺物の希少性からⅡ期とⅢ期の厳密な時期区分が困難なものが多いが、主体はおそらく9世紀後半のⅢ期であろうと思われる。この時期の集落は、一般的な堅穴住居と2間3間規模の掘立柱建物によって構成されている。その配置は、調査区西側の斜面高所に掘立柱建物が、調査区東側の斜面下方に堅穴住居が配置されており、それに近接して柵列が見られるのが特徴である。この柵列は、調査区内で途切れており、その全容や性格についても明確ではないが、おそらくは、屋敷地内の建物等の目隠し塀や簡易的な柵で



第41図 B地点時期別遺構配置図

はなかったかと思われる。

IV期とV期の主な遺構は、第8・10・12・14号住居跡と第3号掘立柱建物跡などが該当するものと考えられ、第8号住居跡と第14号住居跡がIV期に、第12号住居跡と第18号土壇がV期に比定でき、その他の遺構については、IV期とV期の厳密な時期区分は困難である。これらの中で、第11号住居跡と入れ子状に重複する第10号住居跡は、他の住居と異なって、カマドが住居のほぼコーナー部に位置し、カマドの燃焼部と煙出部があまり段差をもたずに屋外に延びる形態で、女堀川中流域の蛭川坊田遺跡（恋河内1996）や南街道遺跡（恋河内1996）、小山川右岸の旧那珂郡に位置する秋山大町遺跡B地点などで検出されている11世紀以降と推測される竪穴式住居跡と形態的に類似していることから、あるいは次期のVI期以降に下ることも考えられよう。また、該期とした第3号掘立柱建物跡も、梁行側に比べて桁行側の1間幅がかなり狭く、1間×1間の平面形が明瞭な長方形を呈する中世的な掘立柱建物跡の形態に類似しており、あるいはVI期以降に下る可能性もあろう。

以上のように、本遺跡の古代集落は1期とした8世紀中頃にはすでに形成されているが、この集落がその後10世紀いっぱいまで継続して営まれるのかは、現在までの調査範囲では明確なことは言いがたい。しかしながら、本遺跡の古代集落が主体的に営まれるようになるIII期以降の9世紀後半～10世紀初頭の時期は、当地域における古代集落の変遷過程の中でも、一つの大きな画期として捉えることができる時期である。つまり、広大な低台地の本庄台地上に概ね7世紀後半から9世紀代にかけて継続的に営まれた今井遺跡群（富田・赤熊1985）や将監塚・吉井戸遺跡（井上1986、赤熊1988）及び皂樹原・松下遺跡（篠崎1990・1991・1992）などの律令の大規模集落が衰退しながら解体し、かわって丘陵部やその下の狭小な台地上に比較的小規模な集落が新たに多く形成され、いわゆる集落分布の新展開に見られる集落の再編が窺われる時期である。本遺跡周辺の丘陵部でも、第二章で述べたように、この時期になって多くの小規模な集落が形成されている。

この時期は、政治史的にも古代律令制が破綻し、律令国家から王朝国家に移行する変革期であり、集落においても「九世紀を通じて形成された富豪浪人（およびその従類）の、『結党群居』といわれたような、農村への定着・集住＝村落の形成」が見られ、この時期の「このように公民と浪人が『雑処に群居』する村落は、すでにかつての古代村落ではなく、八世紀いらいの農民分解と浮浪化から生じた成員の流動と階層構成の変化、村落耕地の移動などによって再構成された村落、あるいは新たに形成されてきた村落とみなければならない」ことが指摘されている（戸田1968）。このような主に畿内村落に関する文献史料に見られるこの時期の新村落の形成や村落の再編と、東國の一地方における当地域の類似した集落再編の様相を直接的に結び付けて考えることは、畿内と東國といった地域性を考慮したうえで慎重でなければならないが、文献史料による検討がほとんど困難な当地方では、発掘調査によって得られた考古資料を中心として、考古学的な検討によって個々の該期集落のより具体的な動態と様相を把握し、「律令国家の矛盾がより直接的に及ぶためその矛盾が尖鋭に現れ」、「この矛盾の展開は律令国家への影響がより直接的となり、したがって全国的意義をもつ」（小林2000）とされる畿内村落の様相とその歴史的要因を考慮しながら、当地方における古代村落の解体・再編成から11世紀以降に展開する中世的村落の形成過程を射程に入れて考えていく必要があるが、まずは共通の研究基盤作りとしての発掘調査資料の公表が急務であり、今後の課題である。

<参考文献>

- 赤熊浩一(1988)『将監塚・古井戸Ⅱ—歴史時代編Ⅱ—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第71集
(2000)『熊野/新田』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第251集
- 井上尚明(1986)『将監塚・古井戸Ⅰ—歴史時代編Ⅰ—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集
- 伊藤一美(1981)『武蔵武士団の—様態—』校倉書房
- 梅沢太久夫・高橋一夫他(1978)『精進場遺跡』神川村教育委員会
- 大熊季広(1998)『児玉町山崎上ノ南遺跡B地点の調査』『第31回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会 埼玉県立博物館 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 埼玉県立埋蔵文化財センター
- 小澤正人(1996)『大久保山Ⅳ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告4
- 金子彰男(1991)『中道遺跡第18地点』神川町遺跡調査会発掘調査報告第3集
- 窓河内昭彦(1990)『塩谷下大塚遺跡』児玉町文化財調査報告書第11集
(1991)『真鏡寺後遺跡Ⅲ—C・F・D地点の調査—』児玉町文化財調査報告書第14集
(1996)『辻堂Ⅱ・南街道・宮田遺跡』児玉町文化財調査報告書第20集
- 小林昌二(2000)『古代末期の村落と農民』『日本古代の村落と農民文記』塙書房
- 駒宮史朗他(1973)『枇杷橋遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告第20集
(1974)『中道・西北原遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告第23集
- 坂井久能(1976)『武蔵国金鍬神社の研究(上)』『國學院雑誌』第77巻第8号
- 坂本和俊・鈴木徳雄(1981)『金屋遺跡群』児玉町文化財調査報告書第2集
- 坂本和俊(1973)『城戸野廃寺址』『青柳古墳群発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告第19集
- 篠崎潔(1990)『臼樹原・松下遺跡Ⅱ』臼樹原・松下遺跡調査会報告書第2集
(1991)『臼樹原・松下遺跡Ⅲ』臼樹原・松下遺跡調査会報告書第3集
(1992)『臼樹原・松下遺跡Ⅳ』臼樹原・松下遺跡調査会報告書第4集
- 鈴木徳雄(1996)『金屋条里周辺の灌漑と開発』『東鹿沼・藤塚B1・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査報告書第21集
- 田中広明・末木啓介(1997)『中堀遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集
- 田村誠(1981)『中道遺跡—第2・3地点—』神川村教育委員会
(1982)『神川村遺跡群発掘調査報告Ⅰ』神川村教育委員会
(1983)『神川村遺跡群発掘調査報告Ⅱ』神川村教育委員会
(1985)『神川村遺跡群発掘調査報告Ⅳ』神川村教育委員会
(1986)『神川村遺跡群発掘調査報告Ⅴ』神川村教育委員会
(1987)『神川村遺跡群発掘調査報告Ⅵ』神川村教育委員会
(1988)『神川村遺跡群発掘調査報告Ⅶ』神川町教育委員会
(1990)『中道遺跡第14地点』神川町遺跡調査会発掘調査報告第1集
- 田村誠他(1998)『中道遺跡第15・21・23・25地点 中北原遺跡2・4地点 北下原遺跡』神川町教育委員会文化財調査報告第17集
- 徳山寿樹他(1996)『東鹿沼・藤塚B1・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査報告書第21集
- 戸田芳実(1968)『中世成初期の国家と農民』『日本史研究』第97号 後に『初期中世社会史の研究』(1991)に所収

- 富田和夫・赤熊浩一（1985）『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』
埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集
- 野口泰宣（1991）「児玉党塩谷氏と塩谷郷」『真鏡寺後遺跡Ⅲ - C・F・D地点の調査 -』 児玉町文化財調査報告書第14集
- 昼間孝志（1982）「神川村城戸野廃寺」『埼玉県古代寺院跡調査報告書』 埼玉県史編さん室
- 峰岸純夫（1978）「武蔵國児玉郡枝松名について」『埼玉民衆史研究』第4号

写 真 图 版



天田遺跡 B 地点遠景



B 地点調査区全景



B 地点調査区西側



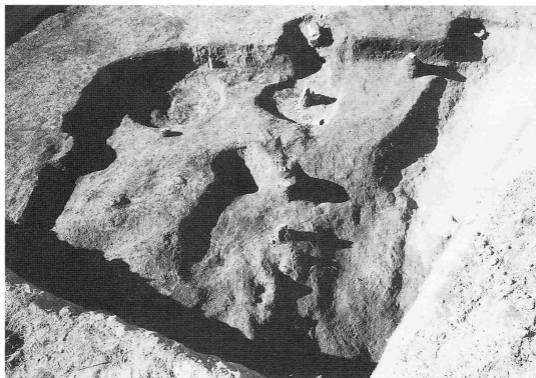
B 地点調査区東側



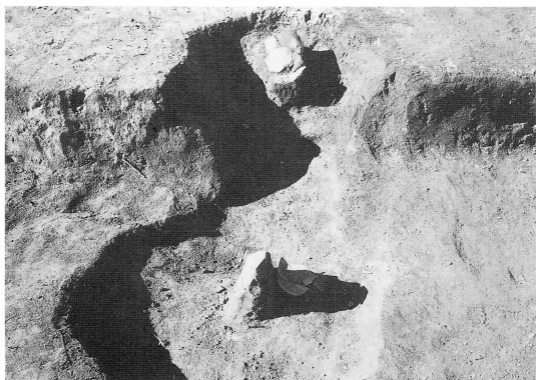
第 8 号 住 居 跡



第 8 号 住 居 跡 カマド



第 9 号住居跡



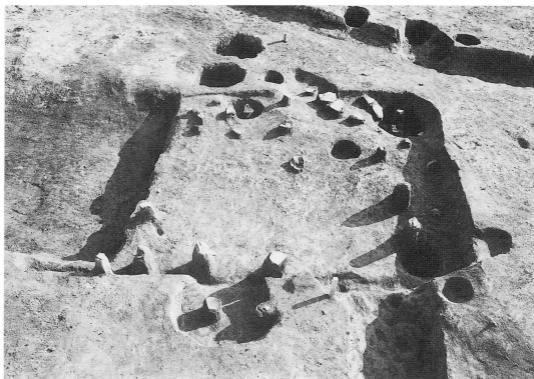
第 9 号住居跡カマド



第10・11号住居跡



第10号住居跡カマド



第 12 号 住 居 跡



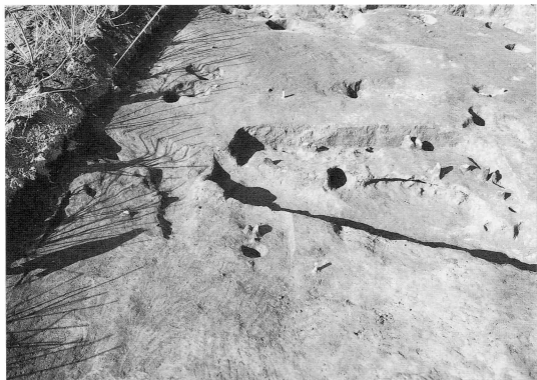
第 12 号 住 居 跡 カマド



第 13 号 住 居 跡



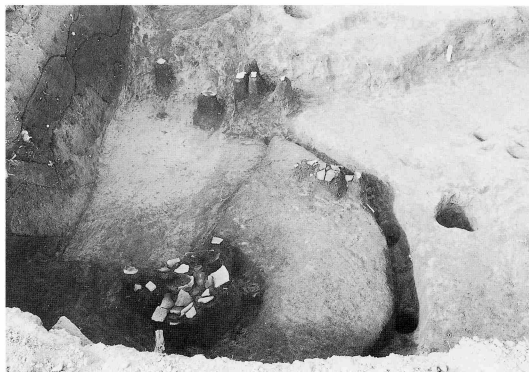
第 14 号 住 居 跡



第 15 · 16 号住居跡



第 17 号住居跡



第 18 号 住 居 跡



第 18 号 住 居 跡 炉



第1号掘立柱建物跡



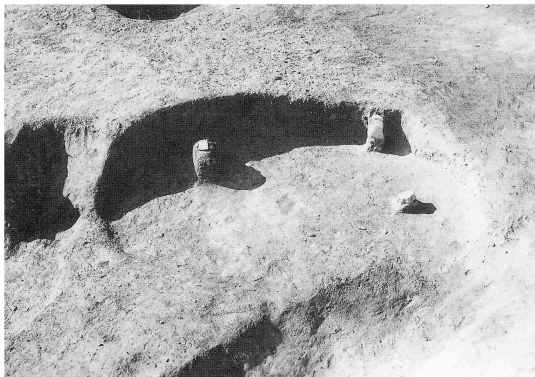
第2号掘立柱建物跡



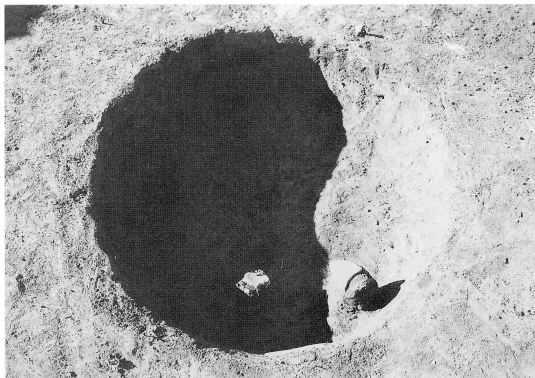
第3号掘立柱建物跡



B地点調査区南東側



第 13 号 土 坑



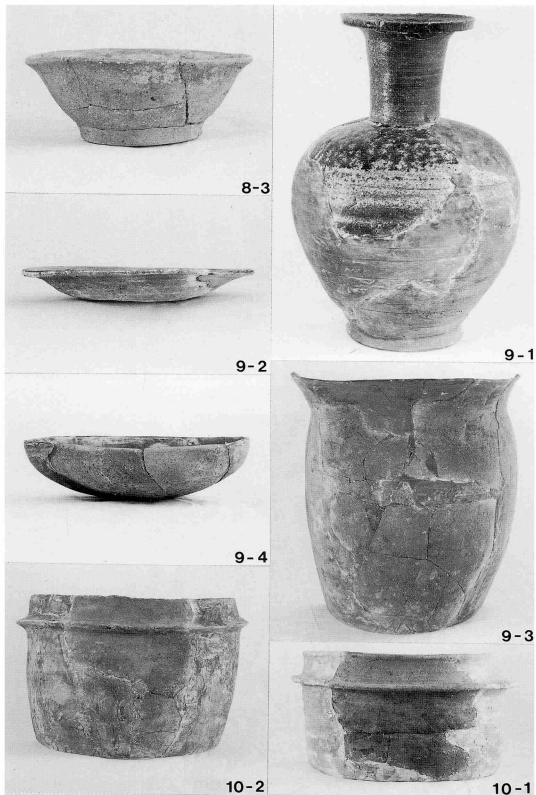
第 14 号 土 坑



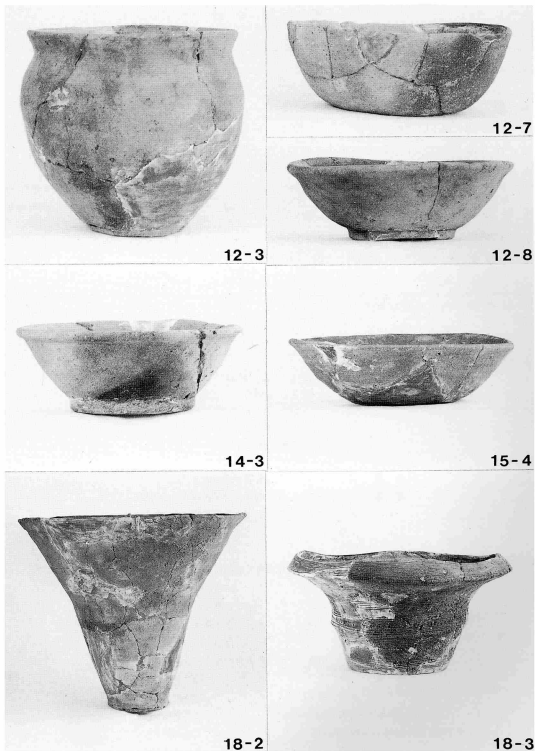
第 18 号 土 坑



第 21 · 22 号 土 坑



住居跡出土土器(1)



住居跡出土土器(2)

報 告 書 抄 録

フリガナ	アマダイセキ (Bチテン)							
書 名	天田遺跡 (B地点)							
シ リ ーズ	児玉町遺跡調査会報告書	巻 次	第 11 集					
編 集 者	恋河内 昭彦							
編 集 機 関	児玉町遺跡調査会							
所 在 地	〒367-0298 埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368番地 TEL.0495 (72) 1331							
発 行 日	2000 (平成12) 年 6月30日							
フリガナ 所 収 遺 跡		コ ー ド 市町村 遺 跡		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
天 田 遺 跡	児玉郡児玉町大字宮内字天田平	113824	104	36°10'59"	139°5'21"	19900104 ? 19900130	971	民間開発
所 収 遺 跡	種別	主な年代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特記事項	
天 田 遺 跡	集落	縄文前期	竪穴住居 2、土壇 2		土器			
	〃	奈良時代	竪穴住居 1		土師器			
	〃	平安時代	竪穴住居 8、掘立柱建物 3、柵 2、土壇 7		土師器、須恵器、灰釉陶器、平瓦			

児玉町遺跡調査会組織

会 長	富丘 文雄	児玉町教育委員会教育長
理 事	田島 三郎	児玉町文化財保護審議会委員長
〃	清水 守雄	児玉町文化財保護審議会委員
〃	小島 和子	〃
〃	吉川 音繪	〃
〃	大塚 勲	児玉町役場総務課長
〃	中林 重	〃 総合政策課長
〃	井上 隆雄	〃 農林商工課長
〃	出牛 博	〃 土木課長
〃	立花 勲	〃 都市計画課長
〃	前川 由雄	児玉町教育委員会社会教育課長
幹 事	永尾 清一	〃 社会教育課長補佐
〃	萩原千恵子	〃 社会教育係主任
〃	鈴木 徳雄	〃 文化財係長
〃	恋河内昭彦	〃 文化財係主任
〃	徳山 寿樹	〃 文化財係主事
〃	大熊 季広	〃 文化財係主事
〃	松澤 浩一	〃 文化財係主事

児玉町遺跡調査会報告書 第11集

天 田 遺 跡

－ B地点の調査－

平成12年6月28日 印刷

平成12年6月30日 発行

発行者 児玉町遺跡調査会
埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368

印刷所 たつみ印刷株式会社
埼玉県深谷市東大沼356番地